

によつても、火酒販賣の停止以來、著しく増大した。缺勤日數の減少は、一労働者當りの生産高を從來一週一〇〇—一一〇布度(石炭)から、一三〇—一四〇布度に増した。(註一)

(註一)「開戦九ヶ月間におけるロシアの經濟生活と住民の經濟狀態」、五一頁。

公平な數字の證明するところによると、鑛山労働の生産性は三〇%の向上どころか、一九一五—一六年度には七・四%、一九一六—一七年度の年初數ヶ月には一九・八%とそれぞれ低落してゐる。労働生産性に對する禁酒の好影響は疑ふべくもないから、——むろん三〇%ではないが、——採炭高の減少は労働者の質の低下によつてのみ説明される、今春、南部ロシア鑛山主會議本部から、炭坑従業労働者の構成について調査票を廻した。この調査票に回答を出したのは二〇三企業、その労働者總數十三萬六千四百二十二であつた。そのうち(註一)

婦人及び未成年者	一七、一四五人	一一・六%
避難民	二、〇一七	一・五
俘虜	一七、二八七	一二・七
既徴集兵役義務者	六四、六二三	四七・四
未徴集兵役義務者	三五、三三五	二五・九
兵役に關係なき男子	一五	〇・〇

(註一)「鑛山業」一九一六年第二一一—二二號、一三五九四—五頁。

憲法第八十七條によつて施行された法律によると婦人や未成年者を坑内作業にも使用することが出来る。現在では労働者數のうち主たるものは既徴集者及び徴集待期者である。その中には勿論、炭坑の困難な労働に適しない者もある。次に質の低い労働者たる婦人、未成年者、避難民、俘虜の割合が二七%に達してゐる。最近數ヶ月來、採炭高がこんなに激落——戦前の殆んど二〇%方——したのは無理ではない。

労働者の状態がこんなでは、平和交渉とか、それにもまして媾和締結が、ドネツ炭田から兵役義務者の大流出を來すことは何の疑ひもない。避難民や俘虜も出て行くだらう。そしたら炭坑は労働者がゐなくて空になるのだ。この種の危機は工場工業や地主私營農場にも現はれるであらう。

政府方面がわが國民經濟の關係について如何に不十分な理解しか持たないかは、一九一五年度國家豫算案に述べた大藏大臣の次の樂觀論を見れば判る。これは外國炭の輸入が杜絶し、敵軍がドムブロフ炭田を占領した後に行はれた言明で、曰く「わが石炭業は、現在ロシアの必要とする、あらゆる石炭を國家に與へるものと豫想すべき充分の根據がある」。(註一)

(註一)「一九一五年度豫算案」、第二編、一一〇頁。

ところがドネツ炭田はあらゆる特典を與へられたにも拘はらず、實際は一九一四—一五年度には一九一三—一四年度に比し六・三%減、一九一五—一六年度には同じく〇・六%増の石炭しか採掘しなかつた

のである。国内市場からドムブロッ炭田が消え、外炭輸入が杜絶したために生じた不足高の理合はせなど思ひもよらなかつた。

特権を與へられたドネツ石炭業でさへもその生産性において辛ふじて戦前の水準を保つてゐるとすれば、わが工業全體の生産性が著減したことは疑ふべくもない。それがどれ丈かは知らない。しかし生産性は百分比で一〇—一五低落したと考へねばならない。どうやらこの數字は真相に近いやうだ。従つて國民所得は、敵軍の侵入によつて蒙つた損害を別としても、戦前の概數一百二十八億から、開戦第三年目には、一百十億乃至一百十五億留に減少するであらう。開戦第一年度には、右の計算によると、國民所得は殆んど減少しなかつたが、第二年度には數億留の減少で、一百二十五億留であつた。敵軍の侵入による損害を全然計算に入れなければ、開戦以來の國民所得の計算は右のやうになる。あらゆる物價の昂騰と留貨の低落とは、ひろん價値を失つた留での計算を一變せしめる。一本の繩をとつてこれを二つに切り、更に二尺差をもつと切つて見る。すると切つた繩を、新しい短い物差で計ると、昔の正常な物差で切る前の繩を計つた時より澤山の尺數があるやうに見えるものだ。さて茲に開戦以來の平均物價指數がどれ位上つたかを示す統計がある。前に擧げて置いた圖式的計算(第二章、一〇九—一一二頁参照)によれば、戦費の壓力だけで物價は開戦第一年度に四五%方、第二年度に九二%方それぞれ上る筈であつた。こんなに價値を喪失した貨幣單位で計れば、わが國民所得は

ひろん大膨張を來すであらう。しかしそれは消耗したがための充満である。  
更に敵軍侵入のため國民經濟の蒙つた損害をも計算するならば、開戦第一年度にはこの侵入のため人口六百四十萬人(即ち全人口の三・七%の領土が占領され、第二年度には人口約二千一百七十萬人(即ち一二・四%)を含む領土が占領されたので、わが國民經濟の収入は昔の一〇〇金哥の留で計算すれば、

戦前.....	一二、八〇〇百萬留
開戦第一年度.....	一一、三〇〇
◇ 二 ◇.....	一〇、四〇〇
◇ 三 ◇.....	九乃至九、五〇〇

現在計算の出来る範圍で調べた、わが國民經濟の生産性低落は大體右の通りである。(註一)

(註一) 大藏大臣は一九一七年度豫算案説明書の中で、一九一六年には國內經濟生活は「一九一四及び一九一五年度に比し、悪化を來した」と認めてゐる。説明書、第二編、一三〇頁。

この國民所得の減少は、國民の各階層に決して均等に及んだのではない。  
まづ農民階級から始めよう。

開戦以來の二ケ年間——今後もこの兩年度を問題にする——に農民の經濟状態に影響を及ぼしたのは、次の諸契機である。(1)作付面積と收穫高の減少、(2)馬匹、車輛、馬具の軍納入、(3)火酒及び麥酒

の販売停止、(4)徴集豫備兵家族への手當支給、(5)家畜農具類の強制的及び自發的販賣、(6)農民の生産及び消費する生産品の物價騰貴、及び(7)農業労働者の賃銀昂騰。

開戦以來二年間の分として、決定的重要性を持つものは一九一四及び一九一五年度の穀類作付面積及び收穫高である。その數値は前述の通り平年のそれに近い。農業労働者の賃銀もこの二ヶ年間には微少な變化を來したにすぎない。顯著な播種不足と賃銀の増大は、農業では一九一六年の夏に初めて現はれたので、開戦第三年目の農民の經濟状態に影響するにすぎない。従つてこの二つの契機は計算に入れる譯には行かない。

農民が軍に提供した馬匹、車輛、馬具に對して幾何の金を手に入れたかは、知らない。一九一四年度の動員費は合計四億五千八百萬留であつた。この金額のうち約三分の二、即ち三億留が農民の手に入つたと想像することは出来る。第一回の動員には約百萬頭の馬匹が軍に徴發され、一九一五―一六年の冬に五十萬頭徴發された。農民はこの第二次動員の時、約一億五千萬留を手に入れたと考へられる。

火酒麥酒の販売停止が農村の福祉にどんなに影響したかは、次の概算で判断できる。第二章にも述べたやうに、國家は酒類消費で年額一億三千七百五十萬留の節約をする。ではこの金額のうち農業に従事する農民はどれだけの分を受持つか？

官營酒類販賣統計によると、歐露の各都市では人口一人當りの火酒消費量は四〇度で一・五三ヴェドロ、農村では〇・四七ヴェドロとなつてゐる。麥酒も同様に、農村よりも都會において澤山消費される。しかし農民は市日に都會に出て澤山の火酒や麥酒を買つたことを考慮して、都市の一人當り消費量は農村住民、農民の消費量の二倍であつたと假定できる。現在帝國の總人口一億七千五百十萬人中、農業各部門に概算約一億二千七百五十萬人があつて、これらの農民は酒類販賣停止によつて年額約六億留を節約したこととなる。

一九一二年六月廿五日の法律によると、戦時に現役に徴集された豫備兵及び國民兵の家族は、國庫から補助金を受けることになつてゐる。この補助金を受ける権利があるのは、(イ)あらゆる場合を通じて應召者の妻子、(ロ)應召者の勞力によつて扶養されてゐた父母、祖父母、兄弟姉妹である。應召者の卑族一名に對する毎月補助金の額は各地の食糧定量に従ひ、小麥粉一ブード二八フント、挽割麥一〇フント、動物油四フント、植物油一フントの價格で計算することとなつてゐた。食糧品價格の大變動があればその都度、また毎年九月一日までに必ず一度はこの定量の改正をすることになつてゐる。五才以下の幼兒は半額を支給される。十七才に達した應召兵の男兒及び未婚の娘は、その勞働不能を立證した場合しか補助を受けない。一九一五年四月十五日、勅裁を受けた内閣令をもつて、應召兵が兵器を使用せずして自發的に投降したる場合、または軍務から逃亡を企てたる時は、その家族の

食糧補助を受ける権利を剝奪することとなつた。

この豫備兵家族扶助組織は、大不足を來してゐる。第一に、一九一六年二月十五日の國會で承認されたやうに、補助金を受ける者の中には、軍務應召兵の勞力で扶助されてゐたなら、その繼子、子の嫁、姪甥、舅姑、伯母の兒、繼父母、異父母兄弟姉妹、養子としない預り兒、内縁の妻子までも含めねばならぬ。次に國會は、逃亡の罪を犯した兵士、または武器を使用せずして投降した兵士の家族に對する食糧定量取得權の剝奪問題は、これを未決のままとして、關係省から兵卒の軍務違犯に關する報告が議論の餘地なく正確に行くことを保證する特別法案の提出あるまで持越すべきであると認められた。戦時食糧補助の額については、各稅務監督局の報告によると、開戦第一年度には次のやうになつてゐた。(註一)

極北諸縣.....	二留三九哥乃至三留五〇哥
沿バルチック諸縣.....	三〇三八〇〇 四〇三六〇〇
沿湖諸縣.....	三〇六〇〇〇 四〇九〇〇〇
西北諸縣.....	二〇五〇〇〇 二〇七七〇〇
中央工業諸縣.....	二〇五八〇〇〇 四〇〇〇〇〇
西南諸縣.....	二〇五〇〇〇〇 四〇五〇〇〇
小ロシア諸縣.....	二〇〇六〇〇〇 二〇五〇〇〇

ノヴォロシスク諸縣.....	二〇五〇〇〇 三〇一九〇〇
中央黒土帶諸縣.....	二〇二三〇〇〇 三〇八〇〇〇
東部諸縣.....	二〇一七〇〇〇 二〇五七〇〇
北カフカーズ諸縣.....	二〇七七〇〇〇 二〇九五〇〇
後カフカーズ諸縣.....	二〇三九〇〇〇 三〇三五〇〇
中央アジア諸縣.....	二〇〇〇〇〇〇 四〇〇〇〇〇
シベリヤ諸縣.....	一〇六四〇〇〇 三〇五〇〇〇

(註一)「ロシア經濟生活の若干面に對する戰爭の影響について」、一九一九頁。

この縣の順序は農産物價格の高い所から先にした。明かに、若干の縣では不當に安い食糧定量補助が決定されてゐる。例へば極北諸縣、西北諸縣、小ロシア諸縣がそれである。これに反して北カフカーズでは補助額は不釣合に高くなつてゐる。次に若干の縣では、——殊に西北諸縣がさうだが、——都市住民の補助額の増加が餘りにも僅少である。また概してこの法律では市民よりも、農民の方が遙かによい保證を受けてゐる。大藏省のある出版物には、現行制度について次のやうな批評がある。「この補助金が自己資金の補助となる場合なら、それで充分である。しかし家族が専ら官の補助で生存してゐる場合には、特にその家族の数が少なければ、多くの場合この補助金では足りない。多くの稅務監督局の回答によると、都市では何でも買はねばならず、住宅、燃料、食料品などの價格が戦時中大騰

貴をしたので、この官の補助金額では都市在住の軍人家族には不充分であるが、自分の土地で經營してゐる農村の住民にとつては、この支給される補助金の額で大體當面の要求を満たすに充分であつた。農村では中流の家族で、自分の住宅や燃料を持ち、ある程度まで食料品を買はなくてもよい者は、貧困に陥らなかつた。土地もない、小家族の者や孤獨者で、稼ぎを失つたものは、非常な悪い立場であつた」。(註一)

(註一) 前掲書、二〇〇—二頁、「現代物價騰貴研究會勞作」、第四輯、一〇八頁。

それ故、國會は一九一六年二月十五日の會議で、都市在住家族補助金の増額を要求した。一部の都市では開戦劈頭から借家賃、煖房費、衣服購入費などの附加補助金を出し、また官の補助を受ける権利のない内縁の家族にも補助金を出してゐた。

この補助金支給が農村の生活にどんな影響をしたかは、各稅務監督局の報告を見れば判る。サマラ稅務監督局の意見によると、「官の食料補助は額は少なりと雖も、半自然經濟の條件下においては、主要消費——住、食及び衣の一部までが、市場及び貨幣を使はずに自己資材をもつて満たされるので、中下流の農民家族にとつてはその受領は重大な意義があつた。食料補助として受取る金は、普通なら農産物を賣つた金で充足するやうな消費に充てる場合が多い」。ベッサラベヤでは地方稅務監督局の報告によると、「これらの補助金は、住民が夥しく自産の食料品を持つてゐる場合には、(特に農村地方に

あいて)、非常に多くの場合に、食糧補助となるばかりでなく、事業や經營改善の財源となり、これらの補助金のうちから借金を拂ひ、經營の赤字を埋め、更に改善を行つたものもある」。モスクワ縣では村民會が村費のうちから應召家族に零細な援助をした。「こんなに各々ことをした理由は、ドミトロフ郡第二學校課稅査定員の考へでは、國庫から支給される援助が充分に應召家族の必要を満たしてゐると農民たちが信じこんでゐることであつて、それは納稅の點では應召家族は平の農家よりも却つて懐具合がよいほどに満足させてゐるのである」。(註一)

(註一) 前掲書、三六—七、五〇、二二二頁。

生活必需品の物價昂騰に伴ふ補助金額の改正については、残念ながら、資料がない。

農村における補助金支給方法も亦、非難を甘受せねばならぬ。スタニスラフスキ—司祭が國會で述べた事だが、司祭は親しく「負傷兵や豫備兵の妻から何度も聞かされたが、補助金を支給する際に侮辱を加へて、これに對して報酬を拂へと要求するさうである。郷保護會の有力者たちは應召兵の妻たちに對し、無報酬で彼等有力者の畑で働けと要求したことを聞かされた」。(註一)

(註一) 「現代物價騰貴研究會の勞作」、第四輯、一一六。

次に農民は合計幾何の補助金を受取つたかを計算して見よう。國庫の統計によると、開戦第一年度の補助金支給總額は次の通りであつた。(註一)

一九一四年八月—九月	三・九百萬留
◇ 十一月—十二月	一一・五・三
一九一五年一月—三月	一二・六・〇
◇ 四月—六月	一六二・〇
(註一) 國會議事録、一九一六年三月八日、二九六八頁。	

各稅務監督局の報告によると、一九一五年三月末日までに合計二億六千七百三十萬留、(註一) 即ち國庫の指摘した額より一千二百九十萬留少く支給された。

(註一) 「戦争の影響」、一九七頁。

一九一五年十一月末までに補助金支給用として六億四千九百三十萬留、次に一九一五年十二月から一九一六年二月までに更に一億八千五百萬留が放出された。この支給と放出とを對照して見ると、一ヶ月の経費は次のやうになる。

一九一四年八月—十二月	三〇・八百萬留
一九一五年一月—六月	三一・三
◇ 六月—十一月	四一・四
一九一五年十二月—一九一六年二月	六一・七

内務次官ブレーヴェは一九一六年二月十五日國會において次のやうに報告した。三月一日に控へた食糧補助の支給をも加算するならば、三月一日以後においては補助金支出總額は十億三千五百萬留に上るであらう。周知の通り、都市においては補助金は一ヶ月前渡しで、農村では三ヶ月前渡しである。従つて右の金額は都市においては三月末まで、農村においては五月末までの補助金支出となる。一九一六年七月末までには、補助金支給のため十三億留以上を支出する。(註一)

(註一) 一九一七年度國家豫算案、第一編、一三三頁。

應召豫備兵の家族は國庫補助金のほかに、なほ市、郡、縣その他の社會團體から補助金を貰つてゐる。稅務監督局の報告によると、開戦以來(一九一五年三月末に至る)九ヶ月間に、應召兵の家族はこの種の附加補助金を合計一千五百萬留餘、即ち國庫補助金の五・六%貰つてゐる。このうち各市役所の出したものの四百七十萬留、地方自治體のもの一百二十萬留となつてゐる。(註二) この金額は餘りにも微少であるから、これを計算に入れなくてもよい。

(註二) 「戦争の影響」、二〇四、二〇六頁。

かやうに應召兵家族は、開戦第一年度に四億四千二百三十萬留、同第二年度に約七億六千萬留の補助金を受取つた。

ではこの補助金のうち農民の取前はどれ位になつたか?

國庫の統計から一九一五年六月末に至る右に引用した補助金支給額を取つて來て——氏は草稿から寫して來た——「現代物價騰貴研究會の勞作」に發表したエス・アー・ベルグーシン氏の證言によると、開戦第一年度に支給した補助金四億四千二百三十萬留のうち、農村住民の取前は約三億四千萬留、(註一) 即ち約七七%である。

(註一)「現代物價騰貴研究會勞作」、第四輯、一〇八一—九頁。

もしさうだとすれば、農民は開戦第一年度に三億四千萬留、第二年度に五億八千五萬留の補助金を得たこととなる。

次に家畜及び器具類の強制的及び自發的賣拂については、その額は概算さへ立たない。國會では、動員の際に勞役家畜や器具類を二束三文で賣拂つたと云ふ意見が出た。(註二) 戦線に近い諸縣では、多數の牛が兵士の食肉用として徵發購入された。しかしその財源から得た金額を算定すべき資料もな

す。  
(註二)「國會議事録」、一九一五年八月十三日、六四七頁、一九一六年二月十九日、一九四七頁、一九一六年三月八日、二九五—七八頁。

かくてわれわれの計算は、農民大衆の家計が戦争の影響をうけて次のやうに變化したことを示す。  
(單位百萬留)

	第一年	第二年
馬四馬具納入.....	三〇〇	一五〇
火酒麥酒販賣停止.....	六〇〇	六〇〇
應召兵家族補助金.....	三四〇	五八五
計.....	一二四〇	一三三五

農民經營から見た右の金額の全重要性を明かにするには、これを戦前のロシア農民社會の家計と比較せねばならぬ。國民所得年額一百二十八億留とすれば、農業農民の取前は約四十六億留で、このうち僅か十五億留前後が穀類、亞麻、牛乳その他の販賣によつて農民の手に入る貨幣所得である。従つて上記の諸原因によつて、農民の貨幣支出は四〇%減じ、貨幣所得は平均四五%の増加となつたのである。

この農民社會經濟狀態の變化は、極めて大きな國民經濟的結果を來した。

穀類を賣る黒土帶の農民は、自家消費を増大し、自家經營産物の販賣を縮少し、その貨幣消費物の需要を増大し、地元及び出稼農業勞働への参加を減らし、地元私有地の小作をやめて、外部への自己勞力の放出を減少した。軍方面の需要と平行して、市場では黒土帶農民の需要が平時に比して旺盛となり、これに伴つて自家經營産物の供給が減少した。ロシア農民經濟が半自然的機構であるため、また農民の基本的消費が自家産物についても充足されてゐないために、物價の昂騰は——農業が資本主

義的性格を帯びてゐる國々で起るやうに、——市場への供給増を來さないで、却つてこの供給の減少、即ち一段の物價騰貴の原因となるやうな結果を招くのである。

極北、工業地帯及び沿湖諸縣の農民は、これと全然立場を異にしてゐた。彼等は自己の貨幣支出を、自家産物の讓與によつて賄ふよりも、工場や都市の稼で賄つてゐる。彼等は穀類の大部分を買つてゐる。従つて彼等にとつては農産物騰貴は積極的な現象ではなくて、賃銀の増加を喰ふべき消極的現象であつた。この半プロレタリア化された農民社會にとつては、工場や都市における賃銀の増加は絶大な意義を持つてゐた。この農民社會の状態については、あとで工場労働者の状態の變化を取扱ふ時に、一緒に觸れることとする。

一九一四年度收穫物の販賣が行はれた時の條件は各稅務監督局の回答に明白に現はれてゐる。本年は「農民は手許に充分な資金を持つてゐたので、よい値を待つて、穀類を慌てて市場に賣出さなかつた。右の事情のため、收穫物の賣出は豫期に反して生産者のために極めて有利に行はれた。ただ何等かの理由で宣戰布告直後に穀類ストックを手離さざるを得なかつた者は別である…… あらゆる穀類の價格は、開戰以來九ヶ月間に、シベリヤを除くあらゆる地方を通じて、著しく昂騰した。しかも多くの地方ではこの値上りは、開戰直後の數ヶ月は最初は緩慢であつたが、その後次第に急調となつた。ある地方(南部、北カフカーズ及び東部の一部)では、一九一四年十二月乃至一九一五年一月頃か

ら急騰をつげた。かうした強調で絶ゆることなき穀類價格昂騰のため、收穫の賣出は生産者にとつても、仲買人にとつても非常に有利に行はれた。いふまでもなくその際の利益の大きさは、全く自家消費を充したあとの手持穀物自由餘剰の量と、賣出の時期の如何によるものであつた。即ち生産者が經濟的に強力であり、従つて大量の自由穀物餘剰を手持し、永く手許に置くことが出来れば、大きな利益を得ることが出来た。一方仲買人にとつては、宣戰布告直後、南部、北カフカーズ及び一部の東部諸縣に現はれた(穀類價格の低落を起した)一種の沈滞を計算に入れなければ、買付が早く、賣渡しが遅ければ、それだけ利益が多かつたのである」。(註一)

(註一)「ロシア經濟生活の若干面に對する戰爭の影響」(1914)二一、三〇—三二頁。

たとへばサマラ縣では一九一四年の秋、「住民は從來のやうに慌てて收穫物の賣渡をしなかつたので、住民の手持穀類は過去數年より多かつた。これは冬期の地方市場への穀類流入統計の説明するところである。秋場に穀類をすつかり賣渡したのは、よくよくの必要に迫られた比較的少數の農民で、あとの者は金に詰ると餘つた家畜(これは値が高かつた)を市場に出して、穀物は冬の半ばを過ぎるまで手許に置くやうに努め、もつと金のある連中は春まで、中には一九一五年夏の新收穫の見透がつくまで手許に残したのもあつた」。ヴォロネジ縣では「少數の例外を除けば、貧しい家族でも、穀物を賣急ぐ必要がなかつたので、市場では供給過剰を來たさなかつた」。サラトフ縣では「農民は收穫物



の賣急ぎをせず、一度に穀物を市場に出さないで、値上りを待つて穀物を出したので、大きな利益を納めた。穀物の賣出は、従來の永い習慣に反して、一九一五年の春まで續いた。チエルニゴフ縣では住民は「開戦直後の數ヶ月間、いつもならその頃（七、八月）市場に收穫を出すのに、一九一四年度の收穫は賣急がなかつた。穀物に對してはいつもの需要さへなかつた。一九一四年九月、軍用農産物買付のため市場に出た地方自治機關は、狀勢を一變せしめ、開戦後數ヶ月間の沈滞のため住民の手許に残つてゐた穀類を、高價に賣る可能性を興へた。」ドン州では「一九一四年度收穫の賣出は、差當り低價格を保合ひ、正常の場合の二五—三〇%に達してゐたが、こんな賣出しを餘儀なくされたのは經濟的に最も弱體な農家だけである。大多數の住民は穀類價格が未曾有の昂騰を來すまで自己の穀類ストックを畜へて、例外的な好條件で收穫物を賣渡した」。特に注目し値ひするのは、シムビルスク縣のある課稅査定員の指摘した次の現象である。「戦争は多くの家族から最も優秀な勞働者と經營指揮者を奪つて、經營の管理を弱い老人や婦人の手にまかせたので、新しく經營指揮者となつた者は極度の節儉貯蓄の必要を自覺した。穀物の價格は高かつたにも拘はらず、應召家族は澤山の穀物餘剰を持つてゐても、それを確りと穀庫や納屋に入れて置いて市場に出さなかつた。一九一五年の春を控へた農家の穀類餘剰が、従來の凶作に續く數年の普通の餘剰高より多いのはこのためであると云はねばならぬ」。(註一)

(註一)「戦争の影響について」、三六、三八、四一、四一—四二、四五、五一頁。

勞働力の不足もこの貯蓄心を助長した。收穫の取入は普通より少し遅れて行はれ、穀物の打穀は例年よりすつと多くの時間を要し、多くの地方ではまだ打穀しない穀物が倉庫に山と積まれ、また穀物の市場搬出も馬の不足と婦人がこの仕事に不慣れたため困難を極めた。穀物の賣渡は主人の仕事だから、主人の命令がないと家に残つた女たちは、不用な穀物の賣渡でも仲々決心がつかないのである。ありとあらゆる出所から來たあらゆる報道の一致してゐる點は、農村に金がだぶつき、且つ取入れ、打穀、穀類の市場搬出が困難なため、農民は秋に安い値段でその經營の産物を賣ることはやめたといふことである。開戦第一年度には五百五十萬人、同第二年度には約一千萬の人間が軍に徵發されたにも拘はらず、家に残つた老人や女子供大衆の消費は減じないのみか、却つて増大した。一九一四年の秋にはもう穀類の市場供出の不足が感ぜられた。十月、十一月および十二月の初めまでは、この現象は秋の泥濘のためだと云はれてゐた。ところが樞路が固まつて見ると、農民の穀類供給が著減したことが明白となつた。「商工新聞」の通信は、週刊穀物市場概評には、農民の窮乏状態や、農民出荷の貧弱さを指摘するやうになつた。(註二)ところが外ならぬこの「窮乏状態」のお蔭で、穀類價格は一九一四年の十二月から急騰をつげたのである。

(註二)一九一四年十二月十九、二十一、二十三及三十日附各號。

それ故われわれは、一九一四—五年度には「農民社會の大多數（中下層）は中及び下値の條件で收穫物を賣つたが、高價時代は彼等の横を素通りした」（註一）といふエヌ・ペー・マカーロフ氏の断定は誤りだと認める。それどころか、あらゆる報道が、農民社會の多數は今年が高價格の利を納め、僅かに最貧家族だけが秋に安い値段で穀物を賣渡したと云つてゐるのだ。

（註一）農學雜誌、一九一四年第七—八合併號、八一頁（この號は非常に遅れて、一九一五年になつて出版された）。

農民はサラトフで話してゐたやうに「金から金へ歩いてゐる」のであつた。安い値段で賣ることを妨げたのは、第一に打穀難であつた。一九一五年の收穫はどうかと云ふと、これは農民にとつては一九一四年の收穫以上に成功的に賣渡された。穀類の價格はずつと高かつたので、弱體農民の安價賣出しといふものは全くなかつた。

開戦第二年目には「現代物價騰貴研究會勞作」第四輯にエフ・アー・リブキン氏が正しく指摘してゐるやうに、況んや「農民が何よりも悦んでその餘剰ストックを振向ける生産的消費こそ、今や極度の物價高と生産的消費物の不足のため充足困難であるから」農民自身の穀類を賣出す刺戟があり得なかつたのだ。土地の買入は全く中止された。けだし主人——賣主も買主も——の大部分が軍に徵集されたからである。それ故、農民は「自己の燒眉の消費の範圍内でしか」穀物を賣らなかつた。次に「農民にとつては、穀類商と同様に、穀類の賣出を澁ることは穀價が上り坂であつたから著しい収入増

を意味し、これに反し直ちに消費する必要のない金と交換することは、貨幣價値低下のため、収入減を意味するのであつた。災害や病氣や不作の際に備へて相當量の物的價値を貯蓄したり保存したりする氣持はあつても、それは價値の下る貨幣としてではなくて、價値の上る穀物で保存しようとするのは至極當然である。最後に、一九一五—六年度に穀類を櫃の中に藏つて置いた重要な動機は、「翌年度に對する不安であつた。新規動員のため……ロシアの南部及び東南部の多くの地方では、秋蒔穀類の作付が著減し、所によつては三、四割以上に上つたところもある。その後引續き行はれた動員のため春蒔作付は一段と減少するに違ひない。かうした條件と、一九一六年度には氣象條件の偶發的組合はせのため不作を來たす可能性もあるので、單純にして自然な用心が農民をしてその手持穀物の貯蓄に向はしめたのである」。（註一）

（註一）「現代物價騰貴研究會の勞作」、第四輯、三〇二頁。

これらの契機は、一九一五—六年度の農民穀類の供給を大いに妨げた。現代の物價騰貴が農業家計に如何に影響したかを算定するには、農産物價格の昂騰ばかりでなく、その消費品の物價昂騰も知らねばならぬ。しかし残念ながら、この種の統計は手許にない。

農村の購買力が如何に向上したか、またその購買力が主として如何なる物品の需要となつたかについて、一九一五年カザン縣會で行つた、カザン縣民の生活に對する官營酒類販賣停止の影響に關す

る調査票に興味ある報告がある。農村からの回答は二、一〇七で、その中には次のやうな主要需要品が挙げられてゐた。

砂糖	一、二二二票即ち五七・五%
茶	一、一九〇
小麦粉	一、〇六八
呉服類	一、〇一〇
白パン	八二二
糖菓	七四七

通信員の回答によると、農村商店の回転率は平均二倍に増加した。地方商人の言によると、以前は農民が小麦粉を買ふのは大祭日の直前で、それも(三等以下の)下級品で、量も僅かなものであつた。ところが開戦の年には、小麦粉の価格が暴騰したにも拘はらず、その消費高は著増した。需要は上等品に向けられ、五等、六等品は殆んど買手かない。時たま賣れるのは黒パンに混入するためである。一九一四年八月から一九一五年六月末までに、カザン市場を通過した各種小麦粉は四百五十萬布度以上であつたが、一九一三—四年度の同期には僅か三百萬乃至三百二十五萬布度がこの市場を通つたにすぎなかつた。一九一四—五年度に同地方の土着民の買つた精製糖は一九一三—四年度より六〇—七〇%多く、粉砂糖は一〇〇%多かつた。砂糖の需要増は、各種糖菓の消費増に依存してゐる。一九一四

年八月以降一九一五年六月末までに、地元工場は前年同期の二十六萬布度に對し、五十五萬乃至五十七萬布度の菓子類を市場に出し、しかもその商品価格は約七五%の昂騰を來した。呉服類の數量は増さなかつた。——理由は單に何處といつて仕入先が全然なかつたからだ。しかし、価格は二八—一五〇%、平均一〇〇%昂騰した。(註一)

(註一)「カザン縣における禁酒の一年」、一九一六年、六一、一三〇—一三三頁。

一九一四年十二月に行はれたボルタワ縣會統計部の調査票もこれと同一の光景を示してゐる。(註二)

一)

(註二)「火酒販賣停止はボルタワ縣民の生活に如何なる影響を及ぼしたか」、一九一五年、四八—五〇頁。

各地の村消費組合長たちは、小麦粉及び菓子の需要増を次のやうに説明してゐる。

——今ではどの家庭も祭日が來ると火酒半瓶と「ザクスカ」の代りに、上等の小麦で作つた洋生菓子と干菓子半封度を用意したがる。大需要を來した理由はこれである。(註一)

(註一)「現代物價騰貴研究會の勞作」、第四輯、三九四頁。

この小麦の需要増は、開戦第二年度において小麦價の暴騰を來した。即ち「商工新聞」に載つた都市聯合會經濟部統計課でまとめた統計によると、穀類物價は次のやうに變化した。(一布度當り、單位哥)

	裸麥	燕麥	小麥
一九一四年七月	一一二	一一二	一〇五
一九一五年五月	一七三	二一七	一三九
七月	一三八	一八八	一一三
一九一六年四月	一八二	二六〇	一八〇

裸麥の価格は一九一四—五年度に六一哥、一九一五—六年度には僅か四四哥の増を來たし、燕麥はそれぞれ一〇五哥及び七二哥の増となつたに反し、小麥の価格は開戦第一年度は僅か三四哥の増であつたのが、同第二年度はもう六七哥の増となつた。(註一)

(註一)「定期出版物の統計による運輸及び市場状況概評」第五輯、六一—〇頁。

要するに、あらゆる商品の物價騰貴は、製品及び生産物の販賣によつて経費を賄つてゐる住民層の福祉であつて、黒土帯の農民もこの層に入る。また實際、彼等黒土帯の農民は、穀物その他の農産物を讓與することによつて、その必要とする消費物を取得し、年貢や酒代を拂つてゐたのである。課税負擔が不變で、酒代が上らないで、しかもあらゆる物價が騰貴したら、歳入家計は著増し、歳出家計は遙に少い増加となるに違ひない。しかしもしも農民の生産物が、農民の消費物よりも價格の騰貴が少い場合には、かうした結果は生じないであらう。ところが、周知の通り、價格騰貴のさうした差は認められない。次に黒土帯農民の家計において主役を演ずるのがその農經營の産物でなくて、地元や

出稼の収入であつた場合にも、この全般的物價騰貴の結果は一變するであらう。疑ひもなく、一九一五年の夏に農民が他人のために割いた労働量は著減した。一九一六年には更に低落した。だがその雇傭労働量の減少と平行してその給付も増加したので、總計においてはこの項目に關する黒土帯農民の家計はむしろ大減少は來さなかつたであらう。

ところが個人的な稼ぎを唯一のまたは主たる歳入項目としてゐる住民階級の經濟状態に對しては、物價騰貴は全然これと違つた影響を及ぼすのである。工場労働者や工業諸縣の半プロレタリア化した農民社會がそれである。これら階級の福祉にとつて決定的重要性を持つものは、國民消費品の物價騰貴に賃銀の増額がどれ位隨いて行けるかといふ問題である。

戦時下において工場労働者の稼ぎに影響する主たる要因は、動員の結果起る労働者數の減少、労働者の質的構成の低下と婦人及び少年労働の大發展、酒精飲料販賣停止の結果たる労働者の生産性の向上、開戦直後の數ヶ月間における操業短縮、次に、時間労働の廣汎な適用及び最後に生活費の昂騰である。労働者の水準は、住民のうち最も労働能力のある部分を動員した結果、その訓練度においても、また労働能力の點においても低下した。多くの場合に、熟練労働者の代りに新米の未熟練工や、婦人や少年工をも使つてゐる。必要な統計資料がないので、これらの變化を檢べることは全然不可能である。禁酒の影響は月曜缺勤のやんだことに現はれた。労働者の労働は能率的となり、作業の質は

向上し、精緻となり、商品の質はよくなった。工業企業主や、その支配人や、更に工場生活と密接な関係にあつて課税調査員の質問を受けた人々の意見によると、労働の生産性と製品の仕上げ振りはこの原因によつて二〇—二五%の向上を來したさうである。(註一)

(註一)「ロシア經濟生活の若干面に對す戦争の影響」、四三五—四四八頁。

出來高賃金の場合には、労働者の稼ぎはその仕上が増加しただけ、機械的に向上する。しかしこの賃金制度下では、労働の質の向上、商品の質を向上せしめる細心さ、材料や機械器具の破損や廢れを少くする規帳面さと用心深さは工場主に有利になつて行く。恐らくこの契機——労働の質の向上——によつて次の矛盾は説明されるものと思はる。即ち工場主の方では、火酒販賣停止の結果、労働者の労働生産性は二〇—二五%方向上したと云ひ、缺勤の中止と労働能率向上の結果たるこの生産性向上の専門調査は金屬工は一〇・五%、纖維労働者は更に少く三・一%であると云つてゐる矛盾である。日給制度なら、賃金定額の特別引上が行はれない限り、労働生産性の増大はそつくり雇主を利するのである。

賃金は戦時下において疑ひもなく増大した。しかしその増大の程度は物價騰貴や留貨の値下りより遙かに後れてゐる。モスクワ工場管區では年平均賃銀は次のやうになつてゐた。

一九一三年	二一八留または一〇〇%
一九一四年	二二一
一九一五年	二五一

この數字には一つの本質的な缺陷がある。といふのは開戦以來労働者の中の婦人や少年の割合が増したからである。この契機の影響を除くためには、工場監督官ヴェ・イー・デイシヤ氏の使つた次の手法を利用出来る。即ち少年工は平均して成年男子労働者の三三%、未成年工は同じく五〇%、婦人は七五%の賃金を取るとする。この數字は相當に實際に近いので、必ずしも正確とは云へなくとも、相當に正しく男子労働者の賃金の動きを算定する結論を與へる。これに然るべき計算を行ふと、次のやうな成年男子労働者の賃金の動きが出る。

一九一三年	二五七留または一〇〇%
一九一四年	二六三
一九一五年	三〇七

デイシヤ氏の計算によると、性別年齢別に關係のない全労働者と、男子労働のみとの賃金は、一九一五年度には各生産種別に見て次のやうになつてゐた。(單位留)

一、棉花加工	全労働者	男子労働者
	二二一	二七八
	二〇九	

二、羊毛加工	二二三	二八二
三、絹加工	二三五	三〇〇
四、亞麻、大麻、黃麻加工	一九五	二五六
五、混紡品	三〇七	三八四
六、製紙印刷	三八一	四五〇
七、木材の機械加工	三五八	四〇九
八、金屬加工	四四五	四八八
九、鍍物加工	二五二	二九三
十、畜産物加工	三七四	四二四
十一、食料品製造	三〇四	三五九
十二、化學生産	二九七	三四二
十三、原料採取	—	—
十四、その他の生産業	四一一	四七八
	二一〇	

労働賃銀の變動に關するものと新しい報告は「モスクワ工業區工場主協會々報」に出てゐる。この協會では殆んど毎月のやうに調査票を廻はして労働者數、その構成、及び賃銀を調べてゐるが、これに回答するのは三〇〇乃至三七〇企業（モスクワ工場管區の總企業數は二八〇〇以上）で、その労働者數二十一萬乃至二十七萬人（總數七十七萬）である。しかも回答を送る工場の数も、その顔觸も毎月

變つてゐる。かう云ふ場合には、調査票の中に、前月分の賃銀または過去數ヶ月間のある月分の賃銀といふ質問項目がなければ、賃銀月額を比較できないのである。この質問があつたので、各月または數ヶ月間の賃銀増減の割合を算出することも出来、また従つてこれらの資料を一本の鎖につなぎ合はせることも出来る。計算の基礎として一九一六年一月の賃銀を採ると、次のやうな賃銀月額の變動となる。（單位留）

	全労働者	男子労働者
一九一五年十月	三四・八	四四・三
一九一六年一月	三五・〇	四五・一
二月	三六・〇	四五・九
三月	四八・二	七四・六
四月	四八・八	六九・七
五月	五〇・三	七一・四

従つて冬期四ヶ月間の賃銀増加は全労働者三・五%、男子労働者三・六%、春期四ヶ月間には全労働者三三・九%、男子労働者六二・五%となつてゐる。七、八兩月には全労働者の賃銀は多少増加したが、成年男子労働者の賃銀は最初低落して、また上つた。毎月の賃銀額が比較的に高いのは驚くに當らない。何となれば調査票に回答するのは、モスクワ工

場管區でも最も労働条件のよい最大工場だからである。モスクワ工場管區の實際の平均賃銀額は、前掲の工場監督統計に出てゐる。

次にモスクワ工場主協會の調査票による賃銀の變動は、相當に正しく擷んであると思はねばならぬ。

冬期には賃銀は年約一〇%の速度で増加し、春期の農繁期が始まつてからは、同じく一〇〇乃至二〇〇%の速度で増大し、六月には低落し始めた。

従つて、賃銀の上る理由は、生活費が高くなるからではなく、——生活費は夏より冬が高い、——農村における労働力不足の結果にすぎない。この労働力不足が微弱な間は、工場労働者の賃銀は極めて緩漫に昂騰した。一九一六年の春と夏には、畑仕事の努力（主として男子）不足は激烈となつた。賃銀は直ちに急増を始めた。そして畑仕事の需要が弱つたかと思ふと、その途端に賃銀は下り始めた。

次に賃銀の動きと、食料品の値上りとを比較して見よう。食糧問題特別協議會事務局の發表した「一九一三及び一九一四年度對比、一九一五年十、十一、十二月の最重要食料品の取引所價格の動き」によれば、一九一三年から一九一五年までの十二月中のモスクワの價格は次のやうに變動した。

(註一)

脱皮裸麥粉.....	一九一三	一九一四	一九一五
小麥粉.....	一〇〇	一三一・九	一九二・八
蕎麥.....	一〇〇	一〇七・九	一六五・一
砂糖.....	一〇〇	一六二・一	二二一・〇
肉(草原牛).....	一〇〇	一〇九・六	一三八・二
鹽藏バター.....	一〇〇	九五・三	一一二・三
鹽.....	一〇〇	一二九・八	二七四・四
平均.....	一〇〇	一〇七・七	一八八・五
		一二〇・六	一八六・〇

(註一) 砂糖と鹽はモスクワの價格がないので、ハリコフの物價を採る。

一九一四年と一九一五年の十二月物價の算術平均値をとれば、全一九一五年度には五三・三%の物價騰貴となつてゐる。従つて、生活必需品が五三・三%の暴騰を上げた間に、賃銀は一九%の値上りを來したのである。明かに、現下の物價騰貴の反作用としてなら、この程度の賃銀値上りでは全く不十分である。またこれと同様に、紡績工、織工及び鑛物精煉工の月收一六・二留、一八・四留、一九・四留及び二〇・一留で、生きることが一九一五年には全く不可能だつたことも明白である。

一九一五年度の労働賃銀一九%の昂騰は、酒精飲料販賣停止の結果を生じ、工場主たちが二〇乃至二五%と評價してゐるところの、労働者の労働生産性向上の範圍内にある。次にこの賃銀値上りは、

一部の生産部門に時間外労働が極度に普及したためでもある。しかし能率的な労働や長時間の労働は、よい栄養を必要とする。この事情をも考慮するならば、賃銀の不足は一段と著しくなる。労働者は餘儀なき禁酒によつて、家計の赤字の一部を埋めてゐる。一九〇八年に行はれたペトログラード労働者の家計調査によると、労働者は火酒、麥酒及び煙草に次の金額を支出した。(註一)(煙草費は大變に僅少であるから、この金額の殆んど全部は酒精飲料費である。)

(註一) エス・プロコボイツイツ著、ペナルブルグ労働者家計、一九〇九年、二一―二三頁。

収入額	獨身者		家族持ち	
	總支出	酒類費	總支出	酒類費
一〇〇―二〇〇	一七二・一	一・七	一〇四五・七	五二・九
二〇〇―三〇〇	二六二・三	一四・六	一一四一・〇	八七・〇
三〇〇―四〇〇	三四七・九	三一・〇	一三九七・一	七〇・四
四〇〇―五〇〇	四四九・五	五三・三	一四〇〇留	四一・二
五〇〇―六〇〇	五四一・九	四六・五	四五七・一	三三・三
六〇〇―七〇〇	六四〇・五	五二・七	五五四・六	三一・〇
七〇〇―八〇〇	七三六・五	六五・六	六五九・九	三九・〇
八〇〇―九〇〇	九二〇・六	七五・四	七五八・三	四八・一
九〇〇―一〇〇〇	!	!	八四三・八	三九・八
			九四三・八	三八・四

平均	獨身者		家族持ち	
	總支出	酒類費	總支出	酒類費
一〇〇〇―一〇〇〇	!	!	一〇四五・七	五二・九
一一〇〇―一二〇〇	!	!	一一四一・〇	八七・〇
一二〇〇以上	!	!	一三九七・一	七〇・四
平均	四四六・四	四二・七	七四八・六	四一・二

これは酒飲の經費である。しかし獨身労働者中の一五・六%と、家族持労働者の八・五%は酒を飲まない。彼等は戦時下の収入不足を埋むべき、この財源さへ持たないのである。次に、この財源の重要性は過大評價してはならない。一九〇八年の調査票に回答を寄せたのは、主として、中以上の稼ぎを持つた労働者であつた。その頃、工場監督局の統計によると、ペトログラード労働者の稼高は三〇〇留前後を上下してゐた。それ故、収入額二〇〇―三〇〇留及び三〇〇―四〇〇留の級が典型的である。その酒精飲料費は労働者一人につき二・四留、即ち家計の七・四%に當つてゐる。火酒代の節約は、物價昂騰に比較した収入減の一部しか埋めることが出来なかつた。この節約がなかつたならば、工場主たちは、疑ひもなく、もつと賃銀を引上げねばならなかつたであらう。だから禁酒の結果労働者の懐に出来たこの蓄積を、工場主たちは自分に有利に織込んだのである。

むしろ、物價昂騰は工場労働者の生産品にも及んだ。しかし市場と労働者の間には工場主がゐて、この値上りを自分の方に取りこんでゐるのである。物價の値上りが均等に二倍となり、賃銀の値上り



もそれと同一ならば、工場主の利潤も物價と同程度、つまり二倍に上るであらう。物價が暴騰したのに、貨銀の値上りが僅か二〇%と云ふ貧弱さであつたため、工場主の利潤は遙かに物價騰貴を抜く暴騰を來したに違ひない。物價騰貴に比し勞働賃銀の値上りが後れば後れるほど、資本家の利潤増はこの物價騰貴を抜くこととなる。戦争は工業家たちに、未曾有の大利潤を齎したが、勞働者には空腹を抱へさせ、革帯を一段と強く締めさせたのである。

工業家たちはお伽話のやうな大儲けをごまかすため、特別の理論まで發明した。彼等は云ふ、「勞働者のために昔の實收を維持するには、物價騰貴と比例して貨銀を増加すれば充分だとしても、貸付資本主の立場は全くこれと違ふのである。貸付資本主は自分の資本をある期間他人に任せる場合に、定期的に支拂はれる擬制収入が次第々に購買力を減ずるばかりでなく、返済の場合には元金そのものが契約成立當時よりも遙かに少い購買力しか持たないといふ危険を冒すこととなる。例へばある資本家が年五%の利率で一ヶ年間十萬留を貸付け、その期間に一般的物價水準は一割上つたとすると、その資本家が五分の利子を得、且つ元金が昔の購買力を持つためには、(即ちその金額が買ひ得る商品の量を昔と變らなくするためには)、資本家は一年の満期の際五千留ではなくて、一萬五千五百留を受取らねばならぬ。このうち一萬留は元金の購買力を最初の額に返すためであり、五千五百留はその元金の利子である。かう云ふ譯で名目利率は一五・五に上らねばならぬ」。(註一)

(註一)「工業と商業」、一九一五年第三五號、「戦争と所得の分配」、七四二―三頁。

この引用をした論文の筆者の意見によれば、この考察は貸付資本ばかりでなく、企業利潤にもあてはまる相である。資本家が損失を蒙らないためには、その利潤は昂騰した所得を齎らすばかりでなく、物價騰貴のため生ずる資本の價值喪失をも埋めねばならぬ、といふのである。

この理論はなかなか喰はせものではあるが、そこには一つの缺陷がある。全く、資本家は物價騰貴時代ばかりでなく、その下落時代にも資本を貸付けるではないか。物價水準が一年に一割下るとすれば、五%の利子を得るためには、この理論によれば、計算の際に五千五百留を借主に支拂はねばならない。資本家は元金の餘剩購買力として、餘分に十萬留を得るが、九萬留の五%は四千五百留にすぎない。従つて資本家は借主に對して一萬留マイナス四千五百留即ち五千五百留を支拂はねばならぬ。この計算の通り、借主から金を取らないのみか、却つて借主に金を拂ふやうな資本家が眼の前に來たら、そしたらこの理論を本氣で取上げることゝしよう。しかしそれまでは、この理論はわが資本家達をその理論家達の大食慾の現はれに他ならぬものと考へて置く。

農民の稼ぎがよく、わが資本家達の稼ぎが素敵によいのに、勞働階級の状態は、少數の例外を除けば極めて困難である。宣戦布告以來影をひそめてゐた經濟罷業が、再びわが工場の日常事となつたのも當然である。

しかし戦争に引かれて行つた労働者の家族の状態はもつと悪い。彼等の受取る補助金は都市の生活をするには全く不十分である。この補助金は、周知の通り、食料補助の性質を帯びてゐるので、農村でならこの補助組織で全く充分でも、都會では出征労働者の家族は食料ばかりでなく、住宅も借り、燃料、衣服も買はねばならない。のみならず家族数が多いほどその一人當りの生活費は安くなる。ところが都市在住労働者家族の大部分は一、二人だから、彼等にとつてはこの補助金は食ふだけでも足りないのである。

工業諸縣の農民は、黒土帯の農民と、工場プロレタリアートの中間の状態にある。彼等の農經營を行つてゐるが、工場の稼ぎは家計上極めて大きな役割を演じてゐる。従つて開戦以來數年間の彼等の物質的狀態は、引上げ引下げ兩傾向の相剋の結果である。概して彼等の生活條件は餘り變らなかつた。尤もその生活條件が若干の改善は明かに認められるが。コストロム及びモスクワ兩縣の地方自治機關の調査は、この意味で大變に貴重な資料を與へる。コストロム縣では、食料補助金も、火酒消費の節約も、「農業から主たる稼人たる男子を引抜かれたために農業の蒙つた損失の一部しか埋めず、全部など思ひもよらぬ。この點はあらゆる非農業職業の大發展をとげてゐるコストロム縣の如き工業縣で特に重大な意義を持つに違ひない」。(註一)

(註一) 「戦争とコストロムの農村」、一九一五年、七八頁。

しかしこの同じ調査資料に、昔は飲酒のため破産に瀕してゐた農家に立直りを認め、今では草鞋を履いた女や、ぼろ服で通學する子供は見かけない(註二)といふやうに指摘した點もあるのだ。茲で指摘して置くべき點は、一九一四年にはコストロム縣は大凶作で、一方この調査は一九一四年十一月半ばから一九一五年一月半ばにかけて、統計課が行つたものであるから、現代の農村生活條件の影響はまだこの調査には充分に現はれてゐないといふ事である。

(註二) 前掲書、一〇三、一二二頁。

モスクワ縣では「回答の大部分(回答者の五九%、即ち過半数)は、財産状態はよくならず、昔の水準であつた、即ち火酒販賣停止は農家の没落を喰とめ、いくらか現代の難局の影響を帖消にした…經營は物價騰貴と、戦争と、一九一四年の凶作にも拘はらず、ぐらつかかなかつた」(註三)と指摘してゐる。この調査には衣服や榮養の改善、特に砂糖と糖菓(註三)の消費に関する資料が澤山擧げてある。この調査は少しおくれで、一九一五年四月に行はれた。

(註一) 「モスクワ郡の農村と酒類販賣停止」、一九一五年、五六、六〇頁。

(註二) 前掲書、五七、六一―六四、七八頁。

ロシア各地の農民の經濟状態の指標となるものは、貯金局の預金増である。「ロシアの財政改革の諸問題」には、一九一四年七月以降一九一五年六月までの、開戦第一年の貯金局の業務と、一九一三―

一九一四年度のそれとを比較したイー・アー・ナゾロフ氏の非常に興味ある論文が載つてゐる。(註一) 氏の基礎的結論は、戦費が預金増に直接的影響を及ぼした、といふ點にある。「戦線に近い背後各縣の預金流入は總流入高の四分の三に達し、奥地各縣の流入は僅か四分の一にすぎない。前年度に比すればこの流入高は戦線に近い背後各縣では十七倍で、奥地各縣では四倍増であつた。この大差は、戦線に近い背後各縣の預金流入に影響したのは、酒類販賣停止よりも、むしろ直接戦争と關聯した各種の條件であることを證明する。それには戦争遂行に關する國家の大経費もあれば、生産業、商業その他から引上げた遊資もある」。(註二)

(註一) 國營貯金局々報一九一六年第一號所載の同氏の論文、「戦時下における貯金局の預金業務とその批判」をも参照。  
(註二) 「ロシア財政政策の諸問題」、第二卷、第一册、一一七頁。

ナゾロフ氏が使つた戦線に近い背後諸縣と奥地諸縣との分類は多少疑問の餘地がある。たとへば同氏はどう云ふ意味か、エカテリノスラフ縣、タヴリツク縣、ゴン州、東部黒土帶諸縣、モスクワ縣、オロネツ縣を戦線に近い背後地に入れてゐる。とは云へわれ／＼として、戦線に近い背後地が非常に大きな預金増を來したといふ氏の基礎的結論を反駁しようといふ意志は毛頭ない。

たゞ「國營貯金局局報」第五號にナゾロフ氏の公表された新しい資料を使つて、奥地諸縣を諸個の群——穀類を買ふ諸縣、同じく賣る諸縣、シベリヤ及び中央アジア諸州——に分類したいと思ふ。す

ると次の表になる。(單位百萬留)

	一九一三—一四年	一九一四—一五年	一九一五—一六年	一九一六年—一六年
一群、西北諸縣	〇・三	三四・六	一一一・五	八三・六
西南諸縣、ウクライナ	(-) 五・〇	四九・八	一三九・五	七七・二
カフカーズ諸縣	四・〇	二二・四	三七・二	二二・六
計	(-) 〇・七	一〇七・八	二八八・二	一八四・四
百分 比(註)	(-) 二・〇	三一・九	三三・九	三〇・八
二群、首府諸縣	一八・三	五九・一	一四〇・五	一〇三・三
中央工業諸縣	九・八	二九・三	八六・九	七〇・四
北部諸縣	三・八	一五・〇	四〇・〇	三一・九
計	三一・九	一〇三・四	二六七・四	二〇五・六
百分 比	八九・九	三〇・六	三一・五	三四・四
三群、東部黒土諸縣	(-) 二・九	四七・八	一〇五・二	八二・二
南部諸縣	二・七	三五・一	八七・〇	五四・五
東南諸縣	一・〇	一八・二	五〇・七	三九・二
計	〇・八	一〇一・一	二四二・九	一七五・九
百分 比	二・三	二九・九	二八・六	二九・四
四群、シベリヤ諸縣	一・九	二〇・六	四〇・七	二六・六
中央アジア諸縣	一・六	四・九	一〇・八	五・三

計	三・五	二五・五	五一・五	三一・九
百分比	九・九	七・六	六・一	五・三

(註) 四つの群全部の預金總額に對する百分比。

ナザロフ氏はこれらの數字から、次の結論を下してゐる。「開戦以來一ヶ半年に預金の流入は戦線に近い背後地方が大部分を占めてゐる。これらの地方の流入高はその總額の殆んど三分の二を占めてゐる。本年一月以降六月までの期(おそらく、その後の數ヶ月も)極度に状態を一轉せしめた。この期に奥地の預金流入は、一九一五年七月十二月期に比し、殆んど三倍の増加となつたが、戦線に近い背後地では預金増は二倍以内であつた。最も増大したのは中央工業地方、東南地方及び東部黒土帯であつた。これらの地方では預金の流入は開戦第二年度後半期に比し、四倍以上の増加となつた。この預金流入の大部分が、周知の通りロシア國民に食料品を供給する地方に當る事實は、おそらくこの預金流入の極端な激變の原因を示すものであらう。今後もおそらく、預金業務の性質には、これと同じ現象が、たとひ一段とひどくはならなくとも、認められるであらう」。(註一)

(註一) 「國營貯金局々報」、第五號、六二―一二頁。

しかし中央工業地方は穀類を賣らずに、買つてゐるのだ。次に、ナザロフ氏のやつたやうに各縣州を二郡に分類しないで、われ／＼の行つたやうに四郡に分類して見ると、開戦第二年度後半期には何

等の激變も起らなかつた事が判る。それは各地方別の預金高の割合を一旦見れば充分に判ることだ。戦線に近い背後地では、全く開戦第二年度後半期に預金額は比較的減少し、工業諸縣及び黒土帶諸縣では多少の増加を來した。しかしその變化は「極端な激變」と稱するには餘りに微細なものである。穀類を賣る諸縣と、戦線附近の諸縣は、開戦劈頭から極度の預金増を示したが、穀物を移入する諸縣はこれに反して預金相對額の激減を來した。また穀類の搬出が極度に困難となつたアジア露領縣州も、預金相對額の多少の低下を來した。

住民の各社會及び職業別の預金分布もこれに劣らず示唆に富んでゐる。この點では、最近三年間の預金は次のやうになつてゐる。(單位百萬留)

地主	一九一三年	一九一四年	一九一五年
農業及び農村職人	二一・七	二一・四	一三六・一
都市職人	八・二	六・〇	四六・八
工場鑛山労働者	七・六	四・四	二〇・七
奉公人	七・四	〇・九	七・一
商業	五・〇	一八・一	一一六・一
宗教	二・二	〇・三	三・九
軍人、將校	〇・七	一七・二	三一・二

同	下士卒	一・三	(一)	〇・三	一一・二
文	官	〇・七		八・四	二八・四
公共私	營勤人	一三・二		二三・五	八一・六
そ	の	二〇・六		四三・二	八五・三
計	他	七九・五		一三〇・一	五七八・一

二二四

軍務に服した者の預金激増は説明を要しない。開戦以來、その人数が遙かに多くなつたからである。他の社會群のうち注目に値ひするのは、從來の減少に代つて増加を來した地主と、農業及び農村職人で、この預金増加率は中位である。次は商業で、これは平均の三倍の預金増を示し、工場鑛山労働は平均の二分の一の増加率を擧げた。この各社會群の貯蓄力の變化は上述の説明で全く明白である。

しかし文官の預金激増と、公共及び私營機關勤人の著増は、今すぐには説明できない。

## 第五章 運輸・信用及び商業に對する 戦争の影響

資本主義社會においては、商品が生産地から消費地へ移動する場合に用ひられる機構は三つの部分——運輸・信用・商業——より成つてゐる。もしこの機構が破壊されたり、その機能が不充分になつたりすると、消費中心地では商品缺乏と物價騰貴が起り、生産地では商品のために倉庫がはち切れるであらう。この機構の機能が正常でないために生ずる商品不足は、消費増とか生産不足から來る商品不足と嚴密に區別すべきことは明白である。以上各章に互つて、戦争が國內の生産及び消費に如何なる影響を及ぼしたかを検討して來たので、こんどは戦争がこの仲介機構に如何に影響したか、またこの機構の混乱が需給條件にどんな影響を及ぼしたかを調べて見よう。

現代の運輸界で主役を演ずるのは鐵道であるから、まづこれを説明しよう。

イー・エヌ・ブリオフ氏は、戦争の影響下では運輸業が特に混乱するものと期待してゐた。氏は次のやうに認めてゐた。「鐵道、特に西部國境に向ふ鐵道は、開戦劈頭には全く軍及び軍用貨物の輸送に忙殺され、その後も大部分がこの方面に使はれ、商業貨物輸送は異例な條件下におかれるであらう。」

その結果、もしも水路輸送が大發展をとげてゐて、殆んど輸出杜絶の際、殆んど國內消費を満たし得る状態になつてゐなかつたならば、大難局を生ずるであらう。(註一)

(註一) イー・エヌ・プリオフ著、「未來戰」、第四卷、一八三—四頁。

グーレヴィツチ將軍はこの問題について全然別な見解を持つてゐた。將軍はわが國の鐵道網とその設備の貧弱さは、わが國の經濟戰備に悪影響を及ぼす重要事情の一つであると認めてゐた。近代軍の戰鬪力の必須條件は鐵道網の充分な發達である。けだし現代戰の條件は、國內各地から軍事行動の舞臺へ、軍の存在と活動の必要品(補充人馬、彈藥、食糧その他)の大輸送を要求するからである。それと同時に、軍の足手まといとなつて、その戰鬪力を弱めるやうなものを絶へず送り返す(負傷兵その他の後送) 必要もある。アー・アー・グーレヴィツチは曰く、「鐵道の商業的營業の混亂が最も強く影響を及ぼすのは、常時活潑な物産交換が一段と完成し、それに慣れ切り、従つて國民生活の必要物となつたがために、鐵道の運轉が日常生活の進行に絶大な重要性を持つ國であり、従つて各縣州のある程度の生産専門化が確立され、その生存を保つために毎日絶へず商品や生活品の輸送を必要とする大住民中心地が多數發生を見た國であると思はれるかも知れない。しかしながらこれらの國家では商業の脈搏が早く、鐵道網も當然密に發達し、鐵道の輸送力も發達し、運轉資材も澤山ある。従つてこれらの國家では、軍の動員集結期が終了した後は、鐵道はその貨物の大部分を民需にふり向ける

ことが出来るものと計算すべき根據がある。従つてこれらの國家においては、宣戰布告直後の數日間は、鐵道が比較的に發達してゐない國よりも、國民生活の進行に大混亂が起ることは必至であらうが、その後の全戰爭中を通じて鐵道網の發達した國は、鐵道の貧弱な國よりも、その經濟生活にとつて恵まれた條件にあることは明白だ…… ロシヤにおいて鐵道網の發達が西歐諸國より貧弱で、その輸送力が僅少で、運轉資材の設備が不充分なことは、その領土が廣大で、ロシヤ國家が軍に送る兵數が多い結果、戰時の兵力輸送の必要が大きなこと、關聯して、宣戰布告直後の數日間のみならず、全會戰期を通じて、ロシヤ鐵道の活動を他國のそれ以上に緊張せしめることは明白である。従つてロシヤの鐵道は民需を充足するためには、他國よりも資力が少い。また従つてこの方面では、わが商工業は他の如何なる國よりも難局に陥るであらう。鐵道輸送方面の困難が、どれ位ロシヤの國民經濟生活の條件に影響するかは、わが國の鐵道が一年間に五九、二八二、〇〇〇人の旅客と五、五四四、〇〇〇、〇〇〇布度(一八九五年度)を輸送するといふ一事を見ても判る。かりに戰時中、わが全鐵道の商業貨物輸送が僅か三分の一減少するとしても、輸送さるべき貨物の量は殆んど二十億布度に達するのである。鐵道網の全輸送貨物のうち穀類貨物は四分の一を占めるのが普通であるから、鐵道によつて輸送さるべき穀類の量がこんなに着減したら、戰時下における國民の一般的食料事情に悪影響を及ぼし、穀類過剰地方から送つて來る移入穀類で生活してゐるロシヤの各地の國民食料に多少の困難を來さずには

置かないであらう」。(註一)

(註一) アー・グレイヴィッチ、「戦争と國民經濟」、軍事集録、一八九八年、第二號、三〇一―四頁。

現戦争の經驗は、グレイヴィッチ將軍の豫想が如何に正しかつたかを示した。

しかしグレイヴィッチ將軍はわが國では戦争經濟の最高權威と認められてゐたにも拘はず、わが支配階級は將軍の意見を聽従しなかつたのである。この論文が發表されてから開戦までの十六年間にわが鐵道網の戰闘準備を高めるやうな方策は、一つとして講ぜられなかつたのだ。しかしエス・ヴェ・ルフロフ氏が監理してゐた頃は、戦時下の鐵道の民需勤務能力に強い影響を及ぼした一連の方策が講ぜられた。

戦時下における鐵道運輸の混亂の程度と、その混亂の原因は、一九一六年三月十五日と廿一日の國會の席上、詳細に糾明された。

新交通大臣アー・エフ・トリョーポフ氏が報告したところによると、既に一九〇八年に鐵道局では向ふ五ヶ年間に官營鐵道網を總額九億一千六百萬留、即ち年平均約一億八千三百萬留増強する計畫を立てた。その後一九一〇年に重ねて官營鐵道増強案が提出され、その時は總額十億八千五百萬留と計上された。ところが、一九〇五年から一九一五年に到る十ヶ年間は、これらの案の代りに毎年僅か七千五百萬留前後しか支出されなかつた。即ち鐵道網の擴張は現實の必要の二分の一以下となつてゐ

た。この點で特徴があるのは、次の官營鐵道用運轉資材購入費の統計である。

年次	支出額 (豫算、百萬留)		購入高 (單位毫)		
	客車	貨車	客車	貨車	機關車
一九〇四年	四一・八	一一・三	一六〇〇四	九三七	九三七
一九〇五年	三九・五	七五六	一九二二二	一一四五	一一四五
一九〇六年	四一・四	二三四	二〇六〇一	一一九三	一一九三
一九〇七年	四四・五	一八一	一二三八七	六二七	六二七
一九〇八年	四六・六	三八六	五八八四	四九八	四九八
一九〇九年	二九・四	二五〇二	一〇四七	四〇四	四〇四
一九一〇年	二六・七	一〇四〇	二七五	三三八	三三八
一九一一年	二四・四	一九四六	一二四九	二五三	二五三
一九一二年	一八・八	一三九四	一三六一	九一	九一
一九一三年	三九・六	一一一	八〇四〇	三八五	三八五

一九〇八年末交通大臣エス・ヴェ・ルフロフ氏の出現以來、鐵道の運轉資材設備費は著減し、客車が從來より澤山註文されただけで、貨車と機關車の註文は大いに節約された。その結果、一九一二年年頭には、延長四萬三千七十六露里の全官營鐵道に、機關車は僅か一萬四千七百七十二輛しかなく、このうち三千九百二輛は一八五七乃至一八九一年に鐵道に入つたもので、使ふよりも、むしろ取り壊

すべき古物であつた。従つて四萬三千七十六露里の鐵道網で働いてゐたのは、それ以後の購入車一萬八百七十輛にすぎなかつた。しかるに延長一萬九千七百三十八露里の各私營鐵道には、一八九二年以後の建造にかゝる一萬四千五百五十二輛の機關車が働いてゐた。この比率から見れば、官營鐵道は一萬七百三十八輛ではなくて、約三萬一千七百輛の機關車を持つべきであつた。(註一)

(註一) エス・エス・フルーレフ著、「ロシアの財政とその工業」、一九一六年、六九—七四頁。

鐵道網の貨車不足も同様に大きかつた。エス・ヴェ・ルフロフは經營原則を相當勝手に解釋してゐた。氏は官營鐵道經營上の赤字をなくするため、生産的支出を切り詰め、鐵道網の輸送力とその運轉資材の牽引力をぎりぎり一杯に利用せしめ、嘗つての不況時代のストックを失くしたのである。官營鐵道がこんな状態では、私營鐵道に眞剣な注文を出す譯には行かない。アー・エフ・トリョーポフ氏は國會で述べた、「こんな財政政策は、余の眼から見れば、全然無謀なもので、我々は現在その償ひをしてゐるのである……それ故、わが鐵道網がその輸送牽引力において戦前何等の餘力も持たなかつたのみか、その牽引資材は平時の普通の要求をも遙かに満たし得なかつた事は、全く明白である。絶へざる滯貨や、ドネツ炭田の燃料輸送難や、移民の輸送難や、わが停車場の大部分が不便で狭いこと、ベトログラードやモスクワの如き大中心からの旅行さへ時として難かしいことは、平時から誰も知るところであつた。戦争勃發當時のわが鐵道は右のやうな状態であつた」。(註一)

(註一) 「國會議事録」、一九一六年三月十五日、三四三—三四三頁。

わが鐵道網が西へ行くほど密になつてゐた特殊事情も亦、宿命的役割を演じた。ベトログラード—モスクワ—ハリコフ—セヴァストポリを結ぶ鐵道線の以東では、鐵道の輸送力は、その線の以西より二分の一しかなかつた。(註一)

(註一) 前掲書、三四三四頁。

次にシベリヤの全部と、トルケスタンと、ザヴォロージエ南部地方は、僅かにバトラキでヴォルガ河を渡る一本の鐵橋で他の鐵道と結合されてゐるにすぎない。北部鐵道のウヤートカ經由でウラルや、シベリヤや、ウラヂヴォストクの貨物が出ることは、その輸送力が貧弱なため、バトラキ經由の南方路の負擔を本質的に軽減するものではなかつた。わが鐵道はベトログラードにドネツ炭を供給する能力は全くなかつた。

敵軍に占領された鐵道から持歸つて來た運轉資材は、爾餘の全鐵道の活動を大いに強化した。開戦以來、鐵道網の活動は大いに増大した。この活動については鐵道網で貨物を積んだ貨物列車の貨車及び油槽車數(鐵道業務用を除く)と、貨車及び油槽車の總走行距離によつて判斷できる。開戦以來の數字は全鐵道網の分はないので、モスクワ—カザン鐵道、モスクワ—クルスク鐵道、ニジニゴロド



鐵道、スイズラン—ヴァーシマ及びアレクサンドロフスク鐵道の四鐵道の報告を取るが、これらの鐵道はその位置から云つて、相當に示唆に富むものである。全鐵道網ではなくて、僅か數本の鐵道を取るのだから、貨車の積込のほかに、近隣諸鐵道から受繼いだ分をも、調べねばならなかつた。上記の四鐵道で積込み、引繼いだ貨車及び油槽車は次の通りであつた。

前 半 期	六 月	五 月	四 月	三 月	二 月	一 月	十 二 月	十 一 月	十 月	九 月	八 月	七 月
一九一三年後半年	一九一四年前半期	一九一五年前半期	一九一五年後半期	一九一六年前半期	一九一六年後半期	一九一七年前半期	一九一七年後半期	一九一八年前半期	一九一八年後半期	一九一九年前半年	一九一九年後半年	一九二〇年前半年
一三六七九六三	二六〇四八七二	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三
一三六七九六三	二六〇四八七二	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三
九八・四	九七・九	九八・四	九八・四	九八・四	九八・四	九八・四	九八・四	九八・四	九八・四	九八・四	九八・四	九八・四
一七四一〇五九	三二四〇〇一三	一七四一〇五九	一七四一〇五九	一七四一〇五九	一七四一〇五九	一七四一〇五九	一七四一〇五九	一七四一〇五九	一七四一〇五九	一七四一〇五九	一七四一〇五九	一七四一〇五九
一二七・三	一二四・四	一二七・三	一二七・三	一二七・三	一二七・三	一二七・三	一二七・三	一二七・三	一二七・三	一二七・三	一二七・三	一二七・三

かやうに積込み及び引繼貨車數の減少は開戦第一年度に認めるばかりで、同第二年度には急増して、その後半期には平時の一二七・三%に達した。新聞雜誌に出てゐる全鐵道網の營業統計は、上記四鐵道の營業状態に基いて作つたこの結論と合致してゐる。しかしかくして得た數字は、開戦以來の鐵道網の事業増大を決して全部現はすものではない。といふのは商品積出市場とその積込市場とが變化したため、各貨車の走行距離が大いに増加したからである。上記四鐵道については次のやうな統計になつてゐる。

後 半 期	全 年	後 半 期	全 年	後 半 期	全 年
一九一三年後半年	一九一四年前半期	一九一五年前半期	一九一五年後半期	一九一六年前半期	一九一六年後半期
一三六七九六三	二六〇四八七二	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三
一三六七九六三	二六〇四八七二	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三	一三六七九六三
九八・四	九七・九	九八・四	九八・四	九八・四	九八・四
一七四一〇五九	三二四〇〇一三	一七四一〇五九	一七四一〇五九	一七四一〇五九	一七四一〇五九
一二七・三	一二四・四	一二七・三	一二七・三	一二七・三	一二七・三

開戦以來、直通輸送の絶へざる増大を認める。各鐵道には自線仕立用として、その輸送力の殘餘し

か與へられてゐない。開戦第一年度の前、後半期に自線仕立は平時の八一・〇%及び七五・八%まで低下した。第二年度には自線仕立は急増して、八八・四%に上り、さらに九九・八%に達した。直通輸送が壓倒的であるため、貨車の平均走行距離は急増した。この表の第三欄は一鐵道におけるその走行距離の平均値が如何に變化したかを示してゐる。この前の表で明かにしたやうに、仕立及び引繼貨車數が開戦第一年度に減少したとしても、その原因は鐵道業務の低下ではなくて、貨車の平均走行距離の増大であることが、これで判る。時の経過につれ、自線仕立が増加すれば、それだけ走行距離の平均値も低下する。尙ほこの第三欄の數字は、全鐵道網ではなくて、一鐵道の貨車平均走行距離を示すといふことを忘れてはならぬ。直通輸送の増大につれて、同一の貨車の走破する鐵道の數も増加するか、戦時下における全鐵道網の貨車の平均走行距離は、僅か一鐵道の平均走行距離の増大のみに基いて判断するよりも遙かに大きくなる。

かやうに、鐵道の業務は仕立貨車の臺數のみによつて判断する譯には行かない。も一つ走行距離の値といふ契機を持たねばならぬ。本表の第四欄に示す通り、この業務は一九一三—四年度に比し、各半期毎に二三・五、三五・四、四二・七及び五四・七%とそれ／＼増加してゐる。開戦以來二ヶ年間に鐵道の業務は一倍半以上に増大した。

かう云ふ状態では、戦争中に鐵道の業務が悪化したといふ意味で、鐵道運輸の混亂を論ずることは

出来ない。交通大臣アー・エフ・トリコーポフ氏は、一九一六年三月十五日の國會の議場で、特にこの結論を強調した。氏は斷言した。現在鐵道の業務は「平時の業務を抜くこと四〇乃至五〇%である。これは公平に云つて、あんなに澤山論ぜられ且つ言論機關があんなに多くの時間を費してゐる所の運輸の混亂がないといふことを、反駁の餘地なきまでに證明するものである。運輸の混亂ではなくて、鐵道網發達の不充分さとか、運轉資材の不足とかなら議論も出来るし、またせねばならぬ。鐵道網は全力を擧げて、平時以上の緊張で働いてゐるが、それにも拘はらず鐵道に對する非難が聞えるならば、その基礎的原因は鐵道に對して、その果し得るより遙かに大きな要求をしてゐる點にある」。

(註一)

(註一) 「國會議事録」、一九一六年三月十五日、三四三五頁。

大臣の與へた説明は至極正しい。しかしこの説明は運輸の混亂が存在してゐて、國家の全經濟生活がそのために苦んでゐるといふ事實を取除くものではない。一九一六年三月十二日から十四日に到る全露都市聯盟第四回大會の席上、アー・エヌ・フロロフ氏が報告したが、一九一六年二月後半期には各鐵道驛の滯貨は十五萬車に達し、このうち五萬車は番外であつた。そのため五百七十五驛で貨物の受付を停止した。貨物を積んだ貨車の停滯——即ち線路上の滯貨——は一萬乃至一萬五千車に達してゐた。これは鐵道運輸の混亂ではないだらうか？

ひろん言葉尻をとつて議論すべきことではない。大臣がこの現象に別の名をつけたいと云ふなら、好きなやうにしたがよい。しかし大臣が運輸混乱の論議を禁止しようと企てたのがいけない。一九一六年四月廿七日附ペトログラード戦時検閲委員長回章第一二八四號には、「運輸の混乱に關する」報道と關係ある如何なる情報を言論機關に掲載することも禁ずると指示してある。しかもその回章から感ぜられる様に、問題は主として論説の標題に「運輸の混乱」といふ言葉を使ふことらしい。そしてその同じ回章に、「わが各鐵道の實狀は、鐵道の活動と、現戦時下において鐵道に向つて發せられたる要求との不一致についてのみ論ずる根據を與ふべし」(註一)と附記してあつた。

(註一)「國會議事録」、一九一六年六月三日、四八二〇頁。

これらの要求は甚大であつた。開戦直後の數週間には鐵道は全然個人貨物の受付を停止し、八月末に到つて僅かにその一部の運送を再開したゞけで、それ以上の改善を見たのは一九一四年十月のことであつた。アー・エム・アルツイマノヴィチ氏の統計(註二)によると、經理及び兵員列車のために割いた車輛の百分比は次のやうになつてゐる。

一九一四年 八月.....	四七・八%	一九一四年十二月.....	二五・四%
九月.....	三五・八	一九一五年 一月.....	二四・七
十月.....	三三・五	二月.....	二五・一

十一月.....三〇・三 三月.....二四・四

(註二)「現代物價騰貴研究會の勞働」、第三輯、一一八頁。

交通大臣の評價によると、平均して「兵員の連續輸送及びその他の軍のあらゆる要求を充たすため、われ／＼はわが各鐵道の全輸送力の三分の一以上を割かざるを得なかつた」(註一)のである。

(註一)「國會議事録」、一九一六年三月十五日、三四三六頁。

この状態は、鐵道運輸に關して軍權の露出した無能力のため、一段と惡化した。國會でデー・イー・ゲルツェンヴィッツ氏が指摘したやうに、動員の當時は鐵道は良く働いてゐた、「といふのは輸送そのものが既定の計畫によつて行はれたからである。しかしこの計畫性はそれだけで済んでしまつた。この計畫を第一に忘れたのは、軍管理に移つた戦線の諸鐵道である。無能で未経験で、しかも無知でさへある軍の手が、一擧にして全運轉秩序を異常にして過度な要求に従はせたのである。(左翼席より、さうだとの聲あり)。彼等はどの鐵道も一晝夜のうちに一定したマキシマムの人と貨物しか運べないと云ふ單純な法則を理解しなかつた。彼等はそれ以上の方面を緊張すれば、その理解できない鐵道の技術的限度をこんなに氣輕に踏みにおつても達成しようとした、その目的そのものを害ふといふことを悟らうとしなかつた。その結果はすぐに現はれた。既に一九一四—一九一五年の冬には、戦線の各鐵道では旅客及び軍用運輸は一晝夜に百露里またはそれ以下の速度で行はれてゐた。これ以上の混

亂、これ以上の亂脈は貨物輸送に現はれ、それは戦線の各鐵道の貨車蓄積に反映された」。(註一)

(註一) 前掲書、三四四五頁。

鐵道に對してその技術的輸送力以上の要求をすると、鐵道上に塞子ができる。つまり鐵道線には、絶大な数の車輛が累積するが、鐵道はこれを動かす力がなく、車輛はいたづらに停止してゐて、鐵道の輸送力を低下する。この塞子の形成を來したものは、個々の軍権間の處置の不一致もあつた。例へば次のやうな場合もあつた。ある軍権は數箇列車にスモレンスクへ向つて出發せよと命じ、列車は出發した。ところがこれと時を同じうして別の隊長はスモレンスクの列車到着を停止せよと命じた。かくしてスモレンスクに向つて走つてゐた各列車は、スモレンスクに到着することが出來ず、そのため線路上に列車が停滯して、遂に運轉を杜絶してしまつた。(註一)

(註一) 前掲書、三四六八頁。

それと同時に軍用貨物は屢々長期に亘つて積卸地に停滯し、やがて空車は十把ひとからげて送り返された。そのため「現有車輛數(後方の鐵道の)が極度に盡き果てる時があるかと思ふと、やがて猛烈な空車流入期が來て、各鐵道ともその空車を自線積込に使ひきれないのみか、これまでの借りの埋合はせに直通で次の鐵道まで送りやることさへ出來ない時代もあつた。軍人輸送を確保するための空車の至急回送は、しばしば閑散方向への貨物積込ばかりでなく、繁忙方向への空車回送さへ停止せし

めた。そんな時には線路上に停滯した民間の貨物をその停滯驛で積卸したり、またはそのために他の方向(時には非常に遠い地點)へ送つたりしなければならなかつた」。(註一)

(註一) モスクワ・ポライオンヌイ委員會一九一六年度會合におけるエフ・エヌ・エレメーエフ氏の報告。

これと同様な現象は背後地においても起つた。例へば一九一六年三月サラトフ市の製粉業者はボクロフ——ウラル鐵道の各驛で多量の穀物を買つて置いたにも拘はらず、穀物不足のため休業した。あとで判つたが、その頃この鐵道は、アストラハンで製造し、一まとめにしてルチシチエーヴォ、バクトーその他各地に輸送中の空樽で塞がつてゐたのである。「軍用」貨物としてアストラハンから送り出した總數は千八百車であつた。この運輸業務が一段落すると、陸軍省はサラトフからタムボフへ火藥工場建築用の煉瓦三千七百車と、ヴォエイコヴォ行の將校集會所建築用の煉瓦一千五百車を發送せよといふ命令を下した。(註一)

(註一) 「國會議事録」、一九一六年三月廿四日、三九一四—五頁。

この種の事實は、かつてアー・アー・グレイヴィッチ氏が提唱した、戦時下における鐵道管理の統一を施行する必要(註一)を思はず想起させるものである。

(註一) 「軍事集録」、一八九八年、第四號、三〇八—九頁。

一九一五年七月九月には後送運輸が、後方各鐵道の輸送をすつかり紛糾せしめ、あらゆる鐵道にぎつしり車輛を詰めてしまった。國會でも指摘されたやうに、避難民群は二ヶ月に亘つて十一萬五千貨車、即ちわが各鐵道總車輛數の二五%を占領してゐた。そして避難民の波がすつかりベトログラード——モスクワ——ハリコフ——ロストフをつなぐ幹線に入つてからは、この幹線以東では輸送力がその以西の二分の一だから、文字通り難民の幹線乗廻はしが始つた。東南鐵道のロストフ驛では、同一の避難民が、同じ驛を六回も往復したといふ記録がある。正規の手續もとらずに後送された貨物も澤山あつた。その結果、書類に出ない個々の貨車ばかりでなく、澤山の工場から出した貨物が、一定の行先も持たずにいろ／＼の鐵道を旅行して廻つたのである。(註一)

(註一)「國會議事録」、一九一六年三月十五日、三四三四、三四四七、三四四八頁。

かうした鐵道運轉の崩壊を土臺として燎爛と咲き出たのが賄賂である。鐵道從業員の中から數十、數百名の收賄が発見されたのも驚くに當らない。エヌ・ヴェ・ルフロフ氏の行つた鐵道從業員の肅清と、氏が七年に亘る鐵道管理時代に與へた黒百人組各機關への庇護は、各鐵道上で出貨主にも旅客にも顔を見せるあの收賄と強請の根源を説明するものである。注目すべきは新交通大臣のアー・エフ・テルノフ氏も同じ路を進んでゐることである。一九一五年末にロシヤ國民同盟の大會が催された時、新大臣は同大會に出席する代表者の輸送につき支障なき様取計へと各鐵道に命じた。

その結果、各鐵道は工場の必要とする原材料及び燃料を、また各都市には生活必需品を運輸する力がなくなつた。この鐵道運輸の混亂のため特に被害をうけたのは、軍事輸送が殊に大規模に行はれたドニエプル河以西の各地と、鐵道網が餘りにも貧弱であつたヴォルガ河以東の各地であつた。商業輸送の不足はいはゆる物價の喰違ひを起した。即ち消費地では物資不足のため物價は暴騰し、生産地では同じ時に物價が下つたり、その値上りが緩慢であつたりした。往々この物價の喰違ひが大變に大きくなつて、小麥粉や鹽藏バターを、緩送便の受付を停止されても、至急便や客車便で送つても結構徳になるやうにした。も一つの結果は荷馬車輸送の發達であつた。ことに荷馬車輸送の發達したのは、多くの停車場で民需貨物の受付を停止してゐた戰線に近い各地と、製粉業地方と、ドネツ炭田(石炭)であつた。エヌ・ペー・マカーロフ氏が物語つたやうに、鐵道の驛で緩送貨物の受付を停止した場合には、製粉業者たちは、(1)至急便や手荷物で麥粉を送るか、(2)荷馬車に積んで鐵道輸送のきく次の驛まで運ぶかせねばならなかつた。至急便または手荷物による輸送は運輸費を十倍も高める。また最寄の驛への荷馬車輸送はまるで夢のやうな喜劇的な性質を持つてゐる。次に稀らしくない現象を少し述べよう。

「ある鐵道驛から麥粉を荷馬車に積んで、一布度あたり一五乃至二〇哥の運賃で、二〇乃至六〇露里離れた次の驛に送ると、その驛で貨車に積込んで、最初荷馬車を仕立た驛を素通りしてモスクワへ

送つてくれる。この貨物が無駄な往復をしたため、鐵道運賃は一布度につき數哥高くなるが、こゝでも返事は一つだ。——麥粉を届けさへすれば、買主ですつかり拂つてくれるのだ」。(註一)

(註一) 全露都市聯盟經濟部編、一九一五號「秋における製粉業の狀態」、第二輯、七—八頁。

この鐵道托送難は、商人たちが自分に一等有利な托送を行ひ、不利な托送はやめるやうにして、絶へず物價を高め得るといふ事態を生ぜしめた。一九一六年一月三日、四日の都市聯盟全露大會附屬の經濟協議會でモスクワ消費組合聯盟の議長が報告したやうに、「商業界では取引が買手に有利なほど、品物の入手が困難で、逆に値段が高いほど買入れた品物を手に入れる見込が多いといふ信念が深く根を下した」。(註一)

(註一) 「一九一六年一月三、四日經濟協議會の事業」、二二頁。

荷馬車輸送の盛行は、馬車賃の急騰を來した。といふのは馬も、車夫も、燕麥も足りなかつたからである。

戰爭は信用制度に對して、鐵道以上の大要求を出した。戰費及び財源の章で糾明したやうに、戰爭の出した要求は、はるかに國內信用力を超ゆるものであつた。その結果、開戦以來二ヶ年間に國立銀行は額面五十億留の信用券を流通面に放出し、一九一六年七月十一月中に更に十七億五千五百二十萬

留を放出した。國家の逼迫した貨幣要求は、わが各銀行のバランスシートに特徴ある變化を起させた。即ち國立銀行は國庫の要求を充たすため全力を注がねばならなかつた。國庫の當座預金は戰前には四億、五億、甚しきは六億にも達したのだが、一九一四年九月一日には既に二億三千八十萬留に低下し、同十月一日には二億八百三十萬留に減じた。同時に將來の收入を目當とする國庫貸上金は急増し、一九一四年一月一日現在五千四百三十萬留から、一九一五年一月一日現在は四億一千五百萬留、一九一六年一月一日現在は六億三百五十萬留に達した。また國立銀行が貸上または買入の形式で抵當として取つた國家及び政府保證有價證券の額も増大した。他面、商業手形の割引と商品抵當買付が激減した。この二つの貸方項目を、各種個人及び施設の預金高と對照すると非常に示唆に富んだ表が出る。(單位百萬留)

年月日	個人施設 當座預金	手形割引	商品貸付	割引・貸 付の計	當座預金との 差(▲—不足)
一九一三・一・一	二〇一・二	五三九・〇	一二六・六	六六五・六	四六四・四
一九一四・一・一	一八二・六	四八五・五	六四・七	五五〇・二	三六七・六
一九一四・一・一	二〇七・四	五九五・七	一六〇・四	七五六・一	五四八・七
一九一四・一・一	一八四・七	四〇六・一(註一)	六〇・六	四六六・七(註一)	二八二・〇
一九一五・一・一	四四一・二	六一八・八	一一〇・一	七二八・九	二八七・七
一九一五・一・一	六五五・七	四一三・二	五六・一	四六九・三	▲一八六・四

一九一六・一・一	九三五・七	三八二・二	一一一・八	四九四・〇	▲ 四四一・七
七・一	一二九五・〇	三六七・九	五一・三	四一九・二	▲ 八七五・八

(註一) 一九一四年三乃至七月には、国立銀行の手當割引能力は特別の理由——フランス市場における合同鐵道債の賣出に伴ひ各私營銀行の負債が減少したことによつて激減した。

一九一五年二月まで国立銀行は國家資金のうちから、私營商工業に資金を融通してゐたが、二月以降却つて當座預金として流入する民間の資金を國庫に融通するやうになつた。即ち「現代物價騰貴研究の勞作」に出たゼ・エス・カツエネレンバウム氏の言葉で云へば、「戦前まで国立銀行は主として國庫の資金をもつて營業し、これを商工業に融資してゐたが、今や逆に銀行は主として私人の資金によつて營業し、これを國庫に融資してゐる。以前は、國庫は国立銀行を通じて、私經濟流通の融資者となつてゐた。今やこの同じ国立銀行を通じて、私經濟流通が國庫の融資者となつてゐるのである」。

(註一)

(註一) ゼー・エス・カツエネレンバウム著「戦争とロシアの留貨」、現代物價騰貴研究會の勞作、第三輯一四頁。

それから少しおくれて、一九一五年四月に、株式組織の商業金融諸銀行の現狀にも、これと同じ變化が起つた。これら銀行のバランスシートは次のやうになつてゐる。(單位百萬留)

年月日	當座預金	手形及び商業債務割引	商品及び有爲替貸付	割引・貸付計	當座預金との差(▲—不足)
一九一四・一・一	一七八六・一	二二二四・七	三九六・七	二五二一・四	七三五・三
七・一	二〇一二・六	二四〇八・五	三一六・七	二七二五・二	七一二・六
一九一五・一・一	二一六一・九	二二四九・二	三八三・二	二五三二・四	三七〇・五
七・一	二七二三・七	二一四五・七	三七四・七	二五二〇・四	二〇三・三
一九一六・一・一	三二九八・二	二二二五・八	五三九・九	二八六五・七	四三二・五
七・一	四四六一・五	二五三四・〇	五九五・〇	三一二九・〇	▲ 一三三二・五

国立銀行の業績も、私營各銀行の業績もこんな激變した原因は、これら資金の政府融資が加速度的に激増した點にある。即ち政府及び政府保證有價證券に關する各種業務——買入、貸付、當座預金及びコールローン——としてこれら銀行は各月初に次の金額を支出した。(單位百萬留)

年月	一九一三—四年	一九一四—五年	一九一五—六年	一九一六—七年
七 月	国立銀行 二八六・三 私營銀行 三六六・六	国立銀行 三三〇・〇 私營銀行 四〇三・七	国立銀行 六八・五 私營銀行 一三三・七	国立銀行 七五・三 私營銀行 二五二・〇
八 月	国立銀行 二七二・七 私營銀行 三九八・九	国立銀行 三六〇・八 私營銀行 四九六・五	国立銀行 七三・一 私營銀行 一四九・三	国立銀行 五七・八 私營銀行 二五二・一
九 月	国立銀行 二九八・八 私營銀行 三九八・五	国立銀行 四〇九・五 私營銀行 五三三・三	国立銀行 八六・三 私營銀行 一五九・三	国立銀行 五三・四 私營銀行 二五二・一
十 月	国立銀行 三三二・一 私營銀行 三九七・七	国立銀行 四九八・七 私營銀行 五三三・三	国立銀行 一五〇・六 私營銀行 二五二・一	国立銀行 一五〇・六 私營銀行 二五二・一
十一月	国立銀行 三九八・八 私營銀行 四九八・七	国立銀行 五三三・三 私營銀行 二五二・一	国立銀行 一五〇・六 私營銀行 二五二・一	国立銀行 一五〇・六 私營銀行 二五二・一





つてゐた。その頃の私營各銀行の業態については、大藏省の出版物「一九一四年の國民經濟」に次のやうによく書いてある。

「開戦に先だつ政治的危機は約二週間も續いたにも拘はらず、歐洲大戦争の宣戦となつて現はれたその結果は、ロシアの貨幣市場にとつては一つの豫想外であつた……この切迫した缺乏期に當つて、地方銀行支店の大部分は『正常資金』しか持つてゐなかつた。即ち當座の日常支拂額を目當としたもので、決して異常な要求を充すべき現金高ではなかつたのである。上記の如き状態では『正常な』資金に直ちに盡き、尤大な提出要求の山はなか／＼消えなかつた。取引所の閉鎖はさらに有價證券の賣出と、顧客のコールマネー處分によつて、餘分の資金を手に入れる路を銀行から塞いだ。

一方モラトリアムの宣告は多數の縣に及び、數千萬の手形業務に組込まれた金額を急に解放する見込を奪つた。かくて生じた情勢の結果として、各銀行は貸方業務の大抑制を行つた。即ち商工界が必要な資金を汲取つてゐた普通の財源が殆んど閉鎖されたのである。ところが金に缺乏を感じてゐた商社は皆が皆銀行機關に預金として金を入れてゐる譯では決してないので、多くの商社は僅かに割引によつて運轉資金を得るにすぎなかつたが、これも有價證券市場が閉鎖されたので、いよ／＼詰つた。かくて全財政状態の悲觀論的評價と呆然自失の態度が生れたのである。動員の條件下において自然な預金引出は、外部から刺戟を受けた。即ち客觀的な經營上の必要から生ずる預金拂戻請求に加ふる

に、突如として當該銀行機關に對する信用をなくしたために生じた拂戻要求が起つたのである。また數百萬の預金を有する商社に對し銀行が拂戻を五千乃至一萬留に制限し、もつて當面の状態に對する不信を一層強めた場合も（南部地方で）記録されてゐる。殊に辛かつたのは相互信用會社で、銀行から支援を拒まれ且つ資金が無いため、預金の拂戻を停止するの餘儀なきに到つたものも稀らしくない。かう云ふ金融機關は通常最も基礎が弱く、あらゆる枯尾花的恐怖に憑かれ易い顧客と關係してゐる。呆然自失の状態はまづ實業界の上層に現はれて、右のやうな有様で急速に下部に反響し、そこで紛糾して恐慌となり、ロシアの廣汎な地帯に擴がつたのである。このパニツクは西部及び沿バルチック地方、ならびに南部および東南部において最も強烈になつた。中央ロシアではこんな猛烈には現はれなかつた。首府所在縣、北部、東北部、西部シベリヤ及びカフカース地方も、顯著な困惑を示した。恐慌圏外に残つたのはわづかに北部の數ヶ所と、東部シベリヤと中央アジアだけであつた。」（註二）

（註二）「一九一四年の國民經濟」、大藏省の論文「國際貨幣市場と取引所」四四四―四五頁。

國立銀行は手形の再割引と有價證券の二番擔當を取ることによつて、私營信用機關の應援に乗出した。國立銀行の出した四億二千五百萬留が危機を根絶した。それにも拘はらず、地方の私營銀行幹部の間に現はれたあの困惑感は、その時手持の現金が不十分だとか、當座預金が多くないとかいふやう

な多くの企業を極めて困難な立場に陥れた。最も苦境に陥つたのは中小企業家たちで、彼等は一時あらゆる融資財源を塞がれてしまった。(註一) あらゆる商取引は現金で行はれ、信用は市場から姿を消してしまつた。

(註一) 「開戦九ヶ月間のロシアの経済生活と國民の経済状態」、一九一六年、九四、九五頁。

その後経済生活は次第に戦時下の條件に適應し、産業企業が新設されたり、商業手形の割引が再開されたりするやうになつた。

政府保證のない有價證券に對する私營銀行の業務は戦時中全く變化しなかつた。開戦直前の數ヶ月も、全戦争中も、銀行のこの貸方勘定は、十六億留前後を上下してゐた。これに反し會社設立業務は開戦第一年度に激減し、第二年度に著増した。「商工新聞」の報道によると、開戦以來設立中の許可株式企業數と、その資本金(單位百萬留)を、戦前期に比較すると次の通りである。

月別	一九一三—十四年		一九一四—十五年		一九一五—十六年		一九一六—十七年	
	社數	資本金	社數	資本金	社數	資本金	社數	資本金
七月	二八	二二・一	二二	二八・八	二三	三七・一	六五	一〇五・九
八月	一五	二二・二	三五	三九・四	一八	二五・五	四二	五九・六
九月	二一	四七・三	二二	二二・四	三八	四〇・二	四四	四八・〇
十月	四四	五六・〇	二八	二八・九	三〇	二八・二	五八	六二・八

月	社數	資本金	月	社數	資本金	月	社數	資本金	月	社數	資本金
十一月	二九	三九・三	十一月	二〇	二二・四	十一月	五三	五六・二	十一月	四六	一三七・三
十二月	三六	四二・七	十二月	三一	三九・六	十二月	五〇	九一・七	十二月	—	—
一月	三二	三六・八	一月	一五	一九・八	一月	四〇	五六・一	一月	—	—
二月	三〇	三一・〇	二月	一六	一一・一	二月	三九	三四・〇	二月	—	—
三月	三二	五九・九	三月	一六	二二・一	三月	四五	七四・三	三月	—	—
四月	二五	三〇・七	四月	二二	四四・八	四月	三五	四七・八	四月	—	—
五月	二〇	二五・七	五月	一八	一八・三	五月	六二	八二・二	五月	—	—
六月	三二	五六・八	六月	二一	一三・八	六月	五〇	八五・一	六月	—	—
上半期	一七三	二三〇・〇	上半期	一五八	一八一・五	上半期	二〇八	二七八・九	上半期	—	—
下半期	一七一	二四〇・九	下半期	一〇八	一二九・九	下半期	二七一	三七九・五	下半期	—	—
全年	三四四	四七〇・九	全年	二六六	三一一・四	全年	四七九	六五八・四	全年	—	—

一九一三—十四年度の設立許可會社の資本金を一〇〇とすれば、戦時下の割合は次の通り、

時期	一九一四—十五年	一九一五—十六年	一九一六—十七年
上半期	七八・九	一一一・三	二二〇・四
下半期	五三・九	一五七・五	—

新設會社は殆んど全部、國防のために活動してゐるが、それにも拘はらず設立事業は過渡的な性格を帯びてゐない。設立事業が絶へず増大してゐることは、要するに國內の企業活動の活況を示すもの

である。

二つ以上の裏書のついた手形や、商業債務に關する私營銀行の業務——その割引、これを保證とする特別當座勘定及びコール・ローン——は、(むろん各銀行のバランスシートに出てゐる限りのことだが)、短期國庫債券を差引くと、これよりずつと曖昧である。各私營商業金融銀行は、この業務に對し、各月一日現在で次のやうに支出した。(單位百萬留)

月	一九一三—十四年	一九一四—十五年	一九一五—十六年	一九一六—十七年
七 月	二〇四二・九	二四〇八・五	二一四五・七	二五三四・〇
八 月	二〇七五・二	二四六九・二	二二一四・七	二五八二・九
九 月	二一〇六・八	二四三九・八	二二〇四・六	
十 月	二一一〇・五	二三七〇・三	二二九六・一	
十一月	二一五〇・〇	二二七九・八	二三〇四・八	
十二月	二〇九八・一	二二一四・八	二二八八・二	
一 月	二一二四・七	二二四九・二	二三二五・八	
二 月	二一六〇・一	二二四四・二	二二八三・七	
三 月	二一九四・四	二二四三・六	二三〇〇・三	
四 月	二二五四・四	二二三六・五	二三二八・六	
五 月	二二八二・一	二二五七・九	二三八二・六	
六 月	二三六一・七	二二五五・五	二四四八・〇	

開戦第一年度の前半期に割引その他商業手形業務は二十四億八百五十萬留から二十一億四千九百二十萬留に低落し、同年後半期中この水準を保合、後半期末には二十一億四千五百七十萬留に達した。第二年度前半期には二十三億二千五百八十萬留に増大し、更に同年後半期末に多少の増加を示した。この形勢は、商工活動の若干の不景氣と沈滞を示すものではあるが、それは決して開戦劈頭のバニツクをも、またその後の現金による手形の驅逐をも意味するものではない。と同時に、「財政時報」誌には、銀行方面の算定によると、市場の割引材料は大略次のやうに減少したと指摘してある。(註一)

- 一九一四年末.....一〇%
  - 一九一五年末.....五〇
  - 一九一六年末.....七〇
- (註一)「財政時報」、一九一六年、第二九號、九五頁、更に第五號、一五八頁、第一七號、一七七頁、「商工新聞」第二及び九四號をも参照あれ。

この矛盾の生じた一半の理由は、次の二つの事情である。第一に、各銀行の手許には、大量の固定モラトリアム手形があること。第二に、時の経過につれて、手形總數中の純商品手形は次第に數が少くなり、その代りに主として運轉資金を手に入れるため、また時には資本支出に向ける資金を手に入れるため、發行される金融手形、實業手形、融通手形などの數が増加した。(註二) モラトリアムの特

殊事情下において、この二つの契機は銀行の手持手形資金をすつかり商業流通から絶縁させた。「財政時報」誌の評價例も多大の疑問を起させる。

(註一)「經濟生活と經濟狀態」、九八、九九頁。

それ故、われ／＼としては商工金融狀態については、専ら國立銀行の各支店附屬の清算部の取引高によつてのみ判断できると認めるものである。取引當事者の相互に出した總請求高は、月別で次のやうに變化した。(單位百萬留)

三	二	一	十	十	九	八	七	四	一	一	一
月	月	月	月	月	月	月	月	年	年	年	年
一九七二	一九七五	一九六六	一九六〇	一九九五	二〇三九	一九四九	一九六二	一九一三	一九一四	一九一三	一九一三
一五二一	一五八六	一三五〇	一二四一	一三三五	一二七四	八五七	一五九九	四年に對する百分比	四年に對する百分比	四年に對する百分比	四年に對する百分比
七七一	八〇三	六八・七	七六・一	六六・二	六二・五	四四・〇	九〇・七	六	六	七	七
二八九一	二二二八	二二一八	二二一九	二一九二	二〇四二	一八八八	一六九〇	一九一五	一九一五	一九一六	一九一三
一四六・六	一一七・九	一〇七・七	一三〇・〇	一〇九・九	一〇〇・一	九六・九	九五・九	四年に對する百分比	四年に對する百分比	四年に對する百分比	四年に對する百分比
				三七八八	三八六五	三五五八	二七二六	一九一六	一九一六	一九一六	一九一三
				一八九・九	一八九・六	一七二・一	一五四・七	一九一三	一九一三	一九一三	一九一三

四	五	六	上	下	全
月	月	月	半	半	年
一九五〇	一九三七	二二二八	一一四四二	一一六二八	二二〇七〇
一六七二	一八〇二	一六二〇	七四一二	九五五一	一六九六三
一〇一・三	九三・〇	七六・一	六四・八	八二・一	七三・五
二一八九	二二三五	二八九七	一一八六八	一四七五八	二六六二六
一三二・七	一二〇・五	一三六・一	一〇三・七	一二六・九	一一五・四

開戦劈頭にはパニックの影響をうけて、清算部に提出された請求額は直ちに半數以下に低落した。(一九一四年) その後、信用取引高は次第に増大を來たし、一九一五年十月には戦前の額と同等になり、一九一七年一月一日までに、即ち開戦二ヶ年半の終りには、戦前の標準の殆んど二倍となつた。この信用取引増の國民經濟的重要性を評價する場合には、こゝ二ヶ年半の間にあらゆる物價が暴騰し、留貨の價格が低落し、そのため取引高が貨幣額で二倍に増加したことは、物的生産品の數量では二〇乃至三〇%方の減少を意味することを看過してはならない。各私營大銀行で特に注意すべき點は、その商品及び荷爲替業務——これを抵當とする貸付、これを保證とする特別當座勘定及びコールローン——である。この業務は各月初で次のやうな數字になつてゐる。(單位百萬留)

七	月	一九一三	一九一四	一九一三	一九一五	一九一三	一九一六	一九一三
		年	年	四年に對する百分比	四年に對する百分比	四年に對する百分比	四年に對する百分比	四年に對する百分比
		二八九・五	三一六・七	一〇九・三	三七四・七	一二九・四	五九五・〇	二〇五・五

八	月	二七八・九	二九七・二	一〇六・六	三六四・〇	一三〇・五	五九三・五	二二二・八
九	月	二九四・六	二八〇・九	九五・三	三六二・八	一二三・二		
十	月	三三九・二	二九六・三	八七・四	四〇〇・〇	一一七・九		
十一	月	三七一・七	三三四・五	九〇・〇	四四二・二	一一九・〇		
十二	月	三八六・四	三五九・三	九三・〇	四九一・六	一七二・二		
一	月	三九六・七	三八三・二	九六・六	五三九・九	一五一・二		
二	月	三九七・二	四〇〇・〇	一〇〇・七	五七七・一	一四五・三		
三	月	三八二・八	四〇七・三	一〇六・四	五八五・八	一五三・〇		
四	月	三五四・九	三九八・六	一一二・三	五八四・五	一六四・七		
五	月	三四七・四	三八六・四	一一一・二	五九〇・六	一七〇・〇		
六	月	三三七・一	二八二・八	一一三・六	五八九・九	一七五・〇		

この表を見ても判るやうに、開戦劈頭のバニツクは各銀行の商業業務に殆んど何等の影響も及ぼさなかつた。一九一四年の九月乃至一九一五年一月には戦前期に比し若干の低落(約七乃至八%)を認める。その後、この額は急増し、開戦第二年度後半期には戦前の一六〇%に、同第三年前半期には二〇〇%を超えた。

かやうに商品業務は割引業務と全く違つた行き方をした。市場における信用の低下は割引業務を縮少し、商品業務を伸展させた。何となれば商品は個人または企業に對する信頼と無關係な保證であ

り、しかも物價が一般向上傾向を示してゐる際には、至極たのもしい、第一流の保證であるからである。異常な預金増のために生じた大量の遊資は、諸銀行をしてその有利な投下先を求めしめ、それが商品業務として發見されたのである。戦時下の全市場景氣——信用の低下・運輸の混亂・物價の騰貴——は銀行をこの方向へ押しやつたのである。例へば「軍の背後に最も近い地方、殊に南部地方では、運輸難のためたび／＼商品の注文が困難となり、且つ大量の商品買入を行ふには現金清算が過重なため、私營銀行の行つた、特殊の前貸業務が生れた。この業務の本質は次の點にある。即ち卸賣商人は商品價格の二〇%以下を銀行へ入金する、銀行では所要の商品を自己の負擔と名儀で注文し、入荷後はこれを自己の建物に保管して、注文主の買戻すだけ少しづつ商品を引き渡して行くといふのである。かやうに商人は大量の商品を購入すると共に、將來の値上りの危険を避けることとなる。従つてこの業務では、銀行の貸付許容が賣買取引に先んずる譯で、普通の商品抵當貸付のやうに、取引の後から出来るのではない」。(註一)

(註一)「經濟生活と經濟狀態」八四頁。

この種の信用取引形式はむろん銀行の顧客にとつては極めて有利である。それは卸賣商人に對しその必要とする商品の値上の危険を防ぐばかりでなく、卸賣商人は銀行の援助の下に買入れた商品の買入から賣渡までの期間に生ずる値上りの利をすつかりわが物とすることが出来るのである。最後に、

かやうに銀行の倉庫を利用すると、卸賣商人はよい値の出るまで商品を抑へて置き、甚だしきは値上げをするためわざと大量の商品を市場から引上げることも出来るのである。換言すれば、この信用業務は投機のために廣大な天地を提供するものである。他面、この種の取引は銀行にとつても、至極安全な遊資投下の可能性を與へるので、非常に有利であつた。しかしお客さんのために信用貸で行つたこれら買付業務の齎らした利得が、銀行をして自己の負擔でこの業務を行はうと思ひ立たせたのは當然である。卸商人の投機との協力は銀行をして、その負擔における投機に向はしめたのである。

ひろん銀行の商品業務は十が十まで必ずしも投機的なものではない。従つて、ペー・ペー・ゲンゼリ氏(註一)が行つたやうに、この勘定を商品投機勘定と見る譯には行かない。しかしこれら勘定の一部に疑ひもなく投機的性格を帯びてゐる。この銀行業務はその額が比較的僅少なため、物價に對して決定的意義は持ち得なかつた。(現代物價騰貴の主要原因は諸銀行の投機的活動にあるのではない。)しかし一部商品の値上りについては、この銀行業務は歴然たる影響を及ぼし得たのである。

(註一)「現代物價騰貴研究會の勞作」、第三輯、二五四頁。

例へば、銀行は疑ひもなく砂糖の投機を行つてゐた。(註二)穀類、肉、バター、皮革、各種金屬、更に織物類の投機までしたとも指摘されてゐる。

(註二)「現代物價騰貴研究會の勞作」、第二輯、アー・アー・ソコロフ氏の論文、一六一―一三頁。

例へばサラトフ氏では、アー・エム・マスレンニコフ氏が國會で述べたやうに、次のやうな現象を認めた。「わが商人達は戦時下の状態を然るべく考慮して、あらゆる物品の價格を吊上げた。で商賣としては、軍の必要のために献納もしてゐるが、商賣はまあよい方であつた。ところが突如として新顔の人物がやつて来て、商人たちに『あなたは店をそっくり賣つて、立退きたいと思ひませんか』と云ひ出した。初めはこんな申出は變だつたが、非常に有利な條件をつけたので、商人たちはひろんそれに同意した。ところがかうした店をそっくり買占めると、物價は化物のやうに暴騰して、昔の物價は問題にならない小さくなつた。それは縣から郡に、郡からまた先にと進んで行つて、しばらくの間に全ロシアが物價の騰貴を體驗した。ではわが商人達を誘惑したその見知らぬ紳士達は一體何者かといふに、あとで判つたが彼等はわが國の某々銀行の手先で、その銀行はこの戦争中に巨富を作らうとしてゐるのであつた」。(註三)

(註三)「國會議事録」、一九一六年三月廿四日、三九二―三頁。

國會は一九一六年三月十日と廿四日の議場で、大藏大臣に對しては、その權能の及ぶ範圍で、一部商業銀行の行つてゐる生活必需品及び國防必需品の不當有害なる投機を防止する精力的對策を講ぜよと要求し、また政府全體に對しては生活必需品の不當な物價を人爲的に吊上げてゐる一部銀行の投機活動を抑制するため最も眞剣な對策を講ぜよと要求した。

商業に對する戦争の影響は、鐵道運輸や信用に對する影響とは全然違つてゐた。戦争は國內の商業機關には何等の要求も出さなかつた。軍及び軍事企業の方に充つるための大量の生産品買上、商品の生産および市場供給の減少、運輸の混亂——これらの原因はいづれも戦時下において商品流通に入つて來る商品量が戦前期より激減するといふ結果を來した。かくして國內には商業力と資金の過剰を來した。商業業務に對する戦争の影響は、主として、開戦第一年度前半期には既にあらゆる物價が絶へず、とめどなく値上りしたこと、同年後半期には一部製品の絶對的不足を來した點に現はれた。物價騰貴を來した第一の刺戟は、第一次動員期に戦争の用に充つるため殆んどすべての運輸資材を徵用したことであつた。

その頃、つまり一九一四年七月から十月中頃まで、鐵道では貨物輸送が殆んど全行はれなかつた。その後一九一四年末までの數ヶ月には貨物輸送は制限された。その結果一九一四年下半期の貨物輸送高は、從來數年間の同期の平均輸送量より少くとも總額二十億布度の減少を來した。その當然の結果は、あらゆる消費中心地のストックが大體それと同額だけ減少したことであつた。つまり産業企業及び民間の需要を保證するばかりでなく、各種生産物の自然的物價調整機の役目をするストックが減つたのである。絶へず市場を壓迫し、偶發的な需給の變動を釣り合はせる大量のストックがなくては、安定した物價はあり得ない。商品倉庫が空になると、物價は昂騰の一路を辿つた。

商業に大影響を及ぼした今一つの契機は、一九一五年七月—九月の後送輸送であつた。それに消費地のストックを完全に消盡した。開戦直後數日間における國內商業循環の一次的混亂は、間もなく強調子の値上氣分と變つた。需要が絶へず供給を上廻つてゐたことは、絶へざる物價騰貴を來したと同時に、商人たちに對しては流行おくれでも取物の見切品でも見境なく、あらゆるストックを三割乃至十割、甚だしきはそれ以上の高値で賣らせたのである。出荷商品量による商業循環の減少は、商人から云へば高物價のため十二分に償へた。この高物價は商人たちに莫大な儲けを與へたばかりでなく、動員の當時大ストックを抱へてゐた商人たちの運轉資本を二倍三倍にした。かくて卸商人の立場はすばらしいものであつた。これに比して、その大多數が何等のストックも持たない小賣商人の立場はずつと悪かつた。信用低落の結果、卸商人は貸賣りを停止したり、その常顧客の大多數に對して未済賣掛を大いに取立てたり、以前に持つて行つた商品代金の支拂を求めたりした。内容のよい小賣商人の一部は、この現金取引に順應した。しかし手持の運轉資本を持たないで、専ら信用で商賣してゐた商人は、商賣をたゞんで、強い競争者に席を譲らねばならなかつた。(註一)

(註一)「經濟生活と經濟狀態」、八二—八五頁。「ロシア經濟生活の若干面に對する戦争の影響」、三〇九頁。

全商品の絶へざる物價騰貴は、値上げ投機を大いに助長し、これを失敗のないものとした。倉庫を持つてゐる卸商人は、絶へず物價が急騰し留貨が低落する場合、必ずや商品を自分の倉庫に停めて置

かうと努力したであらう。けだし數日間賣渡しを延期すれば、必ず餘分の利潤を得るからであつた。彼等はこの供給減によつて、ある場合には無意識に、またある場合には意識的に物價を一段と昂騰せしめた。他面留貨の累進的低落は、商人たちをして國內市場における留貨低落損を避けんがため、有りつたけの遊資を商品に注ぎこませた。これがまた需要の増大を生み出した。要するに貨幣價格が低落する場合に、あらゆる商工業者は單なる自己防衛感からして、自己の資本を貨幣形態で保存することを避け、商品または不動産の形態でこれを保持せんと努めざるを得なかつたため、一段と需要を増大し、物價を暴騰せしめた。これに反して、自分の倉庫を持たない小賣商人が投機に参加した割合は遙かに少なかつた。しかし彼等小賣商人は資本主義社會の生産——分配連鎖の最後の一環である。消費者は直接小賣商人と結びつき、小賣商人を通じて上級の各環たる卸賣商人、工場主、地主と結びついてゐるのである。そして凡庸な俗人では現代物價騰貴の諸原因を分析できはしないので、物價騰貴の全責任をまづ小賣商人の投機に背負はせてゐるのである。これは世人の最も愛好する理論の一である。

この小商人の罪だといふ信念の實際的表現は毘込みであつた。そのうちで最も大掛りなものは一九一五年九月八—九日のアストラハン、一九一六年二月十四—十六日のバクー、五月七日のクラスノヤルスク、それから一週間後のエニセイ縣カン郡、ルイブノエ村、同じく五月中のオレンブルグ、そ

の後クバン州などの事件である。その理論的表現となるものは定期刊行物、パンフレット、さてはイ・エス・ブリオフ氏(註一)の浩瀚な「未來戰」以下の専門調査資料に至るあらゆる言論機關で小商人の投機活動を盛んに強調することである。

(註一) 第一卷、二六一頁。

ところが現物物價騰貴を投機業者の行動によると説明し出すと、輿論は直ちに、投機してゐるのは小商人だけではないと氣がついた。即ちエフ・アー・リブキン氏は、「その基礎的特殊性たる買惜みと高値待ちを含む投機は、本質的には……農民大衆にも及んでゐる」(註一)といふ結論に達した。

(註一) 「現代物價騰貴研究會勞作」、第四輯、三〇四頁。

ヴォロネジ取引委員会は、一九一五年取引所及び農業代表第二回臨時大會における物價騰貴及び穀類投機に關する報告の中で、農民の投機について次のやうに述べてゐる。「もし投機といふ言葉を農産物生産者の行動にも使用できるならば、一九一五年中には農民たると、地主たるとを問はず、その明白に表現された生産者投機が認められた。彼等は極度の審重さをもつて、また生産物を手許に残して置かんとする攪まざる傾向をもつて收穫物の賣渡を行つたのである」。最後に、労働者までが投機をしたと非難された。大藏省のある出版物の意見に従ふと、戦時下における高貨銀は生活費の昂騰や労働



力供給の不足によるばかりでなく、「商品と同様に、労働の供給上の不健全な投機気分」(註一)にもよるものである。

(註一)「ロシア經濟生活の若干面に對する戰爭の影響について」一三〇頁。

もうこれ以上どこへも行きやうはあるまい。半自然經濟を營んでゐるロシアの農民や、雇傭の際に高い賃銀を得ようと努める労働者を、彼等は「投機をしてゐる」といふのは、經濟學で使つてゐると全然異つた意味でこの言葉を使用することを意味する。

ひろん市場の駆引や賣買と關聯したあらゆる行動を投機と呼ぶことも出来よう。この種の投機は値段を上げたり、下げたりする投機で、資本主義社會のあらゆる市場取引の有機的な一部をなしてゐる。だからわれ／＼は砂糖を一つ／＼買つても、丸パンを一つ買つても「投機をする」譯である。この意味でなら、その半自然經營から年に數十布度の穀類を販賣する農民も、工場に雇はれる労働者も「投機者」である。この見地から見れば、ひろんあらゆる商人が投機者であり、けだし賣り買ひのあらゆる商取引が投機だからである。しかしさうであればこそ、現代物價騰貴の原因を研究する場合には、この意味で商人を投機者と呼んではならないのである。この推論は、あらゆる分析論的推論と同様に、いまわれ／＼の興味を惹く現象の原因について少しもわれ／＼の知識を増してくれないのである。商人は昔も投機してゐたし、いまも投機してゐる。ところが昔は物價騰貴がなかつたのに、今は

ある。次に、この種の推論は對話者をも、讀者をも欺くことになる。彼等は思はず知らずこの種の意見に、分析論的性質ではなくて、綜合的性質を持たせることになる。全く、のつけから、最初の一言を聞いたばかりで、この筆者は本氣でやつてゐるのではなくて、繩とは單なる綱なりといふやうなテーマについて考察してゐるのだと疑ふのは失禮ではないか。

云ふまでもなく、この種の投機がなかつたならば、即ちわれ／＼が資本主義社會ではなくて、社會主義社會に住んでゐたならば、現代の物價騰貴は起り得なかつたであらう。戦前までは資本主義的生産組織の消極面は、主として労働者階級が感じてゐた。開戦以來、需要供給の原則に立脚する國民經濟組織の消極面は全國民大衆に痛感されてゐる。以前は市場的價格形成制度に、この社會主義經濟制度の基礎に不平を持つてゐたのは労働者だけであつたが、今やこの不満は全社會に及んだ。有名な共同組合論者のアー・エヌ・ラッルーヒン氏が正しく指摘したやうに、「戦時中に私有資本主義商工機構は、その機構が社會にとつて如何に危険な力を發動させるかを、例外的明白さと、説得力を以つて誇示した。現在の躁宴が一年半も経過した今となつては、生活費の『戦時騰貴』は、需要が擴大し運輸が混亂した際に『然るべく』生産品の生産低下を使つた現代商工制度の特質から自然に生れたといふことが、あらゆる市場において既に證明済みだと認められる」。(註二)

(註二)「アー・エヌ・ラッルーヒン、消費組合と生活費の昂騰、「現代物價騰貴研究會勞作」第四輯、四〇〇頁。

かうした物状の下においては、社會主義思想の普及と、現社會制度の基礎そのもの、批判と否定の普及を待つべきであらう。注目すべき點は、現代の經濟生活混亂から右のやうな結論を出した者が誰一人ないことである。それはロシアにおける資本主義の發達が貧弱で、全生産の社會化の可能性を全然排除してゐるからである。だがかりにこの正しい結論が現在、實踐的に實現できたとしても、それは現代の商品拂底と物價騰貴は商人を初め個々の人物の投機によるものだと説明すべきことを意味するのではない。アー・エヌ・ラヴルーヒン氏は問ふてゐる。「では喧ましい投機者は、現代經濟制度の下において、彼の全生存意義をなすところの、唯一の仕事をしたし、またしてゐるといふことが悪いのだらうか。この經濟制度の下においては、成功的投機は昔から合法化されてゐるばかりでなく、普通の條件下においては名譽ある榮光をさへ貰つてゐるではないか」(註一) むろん罪は制度にあつて、人にあるのではない。この制度とこそ闘はねばならぬ。

(註一) 前掲書、三九一―二頁。

しかしながら經濟學は投機、投機者といふ言葉に別の、もつと狹義で、しかも狂惡な意味をも含ませてゐる。この意味で投機と解されるのは、生産品不足の人爲的尖鋭化を目指す行動——價格吊上を目的とする生産品の隠匿または市場よりの取戻し、販賣中止、取寄せの縮少、その破損又は廢棄、生産制限、工場主または商人のストライキ——である。次の事實はこの種の投機の一例とならう。一九

一五年モスクワで砂糖の大不足を告げ、砂糖屋の前には「まるでシャリャーピンの獨唱會のやうに」買手が長い列を作つてゐた頃のこと、モスクワのある停車場には莫大な砂糖が積んであつた。ところがその砂糖は引取人待になつてゐたので、驛長もその砂糖の荷受人が誰であるかも知る由もなかつた。驛長はその砂糖荷主を知りたいと思つて、次の方法を探つた。驛長はモスクワ中の大砂糖店に向つて數ヶ月來驛の倉庫に入れたきりで、引取りに來ない砂糖があるが、それは貴店の持物ではありませんかとたづねた。ところが皆んなその砂糖は自分の物ではないと答へた。そこで驛長は次の方法を取つた。驛長は新聞に廣告を出して、もし三日以内に引取らなければ、砂糖は沒收すると通告した。すると早速、その翌日百臺の荷馬車をやつて、その砂糖の運搬を開始したのである。この例はそここゝでも生活必需品の不足を來たすのは、必ずしもその市または町にこれらの必需品がなかつた結果ではないことを示すものである。實際はその必需品はあつたけれども、隠匿者、つまり投機者の手にあつたのである。(註一)

(註一) 國會議事録、一九一六年三月十五日、三四六五―六頁。

商人が投機をした、惡質の投機をしたといふことには、何等疑問の餘地はない。問題はその惡質の投機が現代の國民經濟生活混亂の中で如何なる役割を演じてゐるか、それは主原因であるが、幾つかの主原因の一つであるか、または(小額通貨の不失がその買占を起させたやうに)、現代商品拂底の必

然的同伴者、結果であるかにある。

われ／＼としてはこの最後の見解が正しいと思ふ。そして商品の生産と供給がその消費と需要に適合しなかつたために生じた商品拂底と物價騰貴を土臺として演ぜられた惡質の投機は、より以上の物價騰貴を比較的に少しばかり助長したに過ぎなかつたと考へる。もし今日でもこれに反する輿論があるとするれば、それは問題に對する俗流の態度のほかに、尙ほ幾つかの原因を持つてゐるのである。

第一に、開戦當初多くの人は、生活必需品の輸出國たるロシアでは、輸出の杜絶はこれら生産品の價格暴落を來すであらうと考へてゐた。既にイー・エス・プリオフ氏も、外國貿易の杜絶に伴ひ穀物の需要は減少し、その價格は低落する、けだし軍用穀類買付の盛行は輸出杜絶を償ひ得ない、また亞麻、羊毛、木材の輸出杜絶も同一の結果を來すであらう(註一)と期待してゐた。

(註一)「未來戰」、第四卷、一八一頁。

この意見には、プリオフ氏の見解の特徴をなすところの、國民經濟に對する影響は直接戰費よりも、輸出杜絶の方が大きいとする、輸出の過大評價が疑ひもなく現はれてゐる。開戦當初この見解がどれ位廣く行はれてゐたかは、次の一例の示す通りである。一九一五年度歲入歲出國家豫算案には、輸出杜絶の影響により穀類價格が低落するであらうといふ危惧が明白に表現されてゐるのを發見する。曰く「勿論、收容力大なる軍の消費市場も、中立國及び同盟國への輸出も、食糧穀物の自由な手持

量の全部を喰盡すことは出來ない。とは云へ豫想された價格の急落は遂に認められなかつた。動搖を起した小麥粉價格は中値に止まり、輸出値より安い價格で冬場と春場の穀類を急いで蓄へようとした正常需要の活況と、軍の麥粉需要により強調となつた。陸軍省の行つた廣汎な穀類買付は……國內穀類市場に本質的な貢獻をなし、價格の低落を喰止めたばかりでなく、多くの場合にその値上りさへ助長した」。(註一)

(註一)「一九一五年度國家豫算案」、第二編、一一四—一五頁。

「商工新聞」も殆んど開戦第一年度の全期を通じてこの立場を採つてゐた。同紙の見解は非常に特徴があるので、次に二、三引用して見よう。一九一四年九月廿日號には、Y・P・の署名つきで論説が載つてゐるが、その論説に曰く、「……以上に引用した數字によつて、國家と軍が滿一ヶ年間、肉類供給を完全に保證されてゐることを確信し、さらに兵士も肉飢饉を體驗せず、國內市場も重大な激動を味はないと意を安んずるに充分であらう」。同じY・P・の署名つきで、同紙十二月十七日號には次のやうに書いてある。「宣戦布告直後の數週間、動員が個人貨物輸送を停止せしめた時の、未曾有の、全く正常な物價暴騰を、消費者は當面の瞬間において不可避な現象として平然と受入れた。のみならず消費者は、近き將來に安い價格が出てその理合はせをするものと、自ら慰めてゐた。ところが商品の荷動が再開し、商業の脈膊は再び正常に打ち始めたが、豫期の物價低落は來なかつた」。「要する

に、生活用品商業上の投機は今や大規模に達し、その活動は市場商業のあらゆる領域に浸透してゐる。われ／＼はこれらの引用文を珍稀にして特徴のある歴史的文献として挙げたのであるから、その中に含まれてゐる明白に誤つた判断、例へば一九一四年の十二月に既に商品荷動きが再開し商業の脈膊が正常に打ち始めたと云つた種類の断定は、こゝでは訂正しないこととする。

次の引用は十二月卅一日號から取つたもので、曰く「現實の事態に反して増大し行く物價騰貴は、あらゆる言論機關の精力的抗議を受けてゐる」(それから「新時代」の肉の騰貴に關する論説を引用してある)。一九一五年二月七日號に曰く、「主として不健全な投機によつて起された生活必需品の物價騰貴防止は、各市で具體的な形式を採るに到つた。ツヴェークでは生活必需品の價格は毎日昂騰し、特に穀類商品が甚だしい。商人は商品の鐵道輸送停滯のために物價騰貴が起つたと説明してゐるが、實は列車の運轉は正常であるから、物價騰貴は専ら投機のみによつて起されたものである。この點に鑑み、市會では回目の會議で生活必需品公定價格施行問題を討議することとなつた」。最後に、一九一五年二月廿五日號には既に次のやうにある。穀類の高値は消費中心地が軍事行動地方のみならず、生産地にも及んでゐる。即ち穀類の物價騰貴はヴォルガ河下流地方でも確認されてゐる。主原因は投機である。

開戦と共に、この種の市場景氣觀に毒されたのは、大藏省およびその側近の方面ばかりではなかつた。例へば有名な社會運動家のデー・イー・シャホフスコイ公は一九一四年八月十四日と二十二日の二度に互つて、モスクワ農業協會で二つの報告——「農民經營と戦争」と「戦時下における農民經營保持策」——を行つた。この兩報告とも、その中に提唱されてゐる對策も、戦争が農民家計の貨幣部をすつかり破壊した、といふ思想から出發してゐる。シャホフスコイ公の行つたこの思想の表現展開は特徴がある。公は云ふ、「余はく／＼しい證明を行はない。けだし參會の各位から反駁を受けるものと想像しないので、無用の勞をさけるまでである。余は數字を擧げない。けだし普通の經濟生活の破壊過程はあまりにも破局的であつたし、また開戦一ヶ月後の今日その自覺は深く社會に侵透したので、余としては當に來たらんとし、また一部は既に始まつた雷雨の一般的意義を判断するには、危機を最も簡單に特質づけるだけで十分であらうと思ふ。まづ第一に、貨幣と引換へに讓渡される農民労働の産物が、わが輸出品であつたことを想起しよう……全體として農民經營はその貨幣部において、外國の貨幣に養はれてゐるのである……今やその輸出は存在してゐないのである。この一事は、農民經營が嘗つて一度も、こんなに大規模に、こんなに突發的に、しかもこんなに完全に體驗したことのない破局であると余は考へるものである」。軍需はこの失はれた輸出の僅か一部しか埋合はせない。「戦争が何時まで續くか、何時になつたら南部地方の輸出が恢復し、また従つてわが小麥の價値が少しなりと正常化するか、全然豫想が立たぬ。もしさうならなければ、小麥はその持主にとつて何

の價值もなくなるであらう。けだし國內市場では小麥の買手を見つけることは出來ず、従つて決つた時間内に小麥を賣らねばならないとなれば、その價格も無限に低落するであらう。亞麻一布度の價格が五留から五十留に、即ち亞麻の播種收穫費は論外として、麻布の織賃にも足りないまでに低落しないと保證してくれる人は一人もない。かういふ状態だから、一部では最低公定價格を施行せよといふ提案もあつてゐるが、シャホフスコイ公は別の對策を提唱してゐる。「余としては、かくて生じた事態を脱却する唯一の手段は、外國資本の姿で今市場から消えた購買者の代りに、別の購買者を持つて來ることにあると思ふ。このやうな購買者になり得るのは國家だけであつて、余として云はしむれば、國家はこの道に進むべきである」。(註一)

(註一) 「農」<sup>ウエストニク・セリスカウ・オホジャイストワ</sup> 報一九一四年第三四、三六號よりのデー・イー・シャホフスコイ公の抜刷報告、

八月十四日の報告四一五、一二頁、八月廿二日の報告七一九頁を参照。

これが非常に廣汎な輿論の期待であつた。だから生活必需品の物價が上り始めた時、多くの社會運動家がこれを異常な、人爲的な現象を認め、投機の罪にしたのは當然である。

デー・イー・シャホフスコイ公は社會運動家であつて、經濟學者ではない。ではその頃、押しも押されもせぬ經濟學者たちがどう考へてゐたかを聽いて見よう。まづ戦前に物價騰貴について特別の獨口録を書いたカー・アー・バジトノフ氏を取ると、氏はすつかりシャホフスコイ公と同意見である。

「現代は最近十五年來昂騰を續けて來た生活費を幾らか引下げる上で非常に恵まれた時代と認めねばならぬ。國內市場が、對外輸出の缺乏のため販路を求めてゐる生活必需品に充たされてゐると云ふ意味で恵まれた時代である。こんな機會は又と來はしまし、戦後にも再び物價騰貴の傾向が來るものと認めねばならない。それ故、地方自治機關や消費組合から、販賣と消費を組織するため、生産者との直接連絡を確立し中間に介在する他の仲介機關を排除するやう、精力的な努力を拂ふ必要がある。何となれば今や國家は明白に異常で、深刻な逆説味のある現象に直面してゐるからである。即ち地方の生産者は販路のないことを痛嘆し、都市の消費者は餘りに高い物價を慷慨してゐるのである！かくして生じた状態から來る利益は買占人と仲介者が壟斷してゐるのだ。かう云ふ状態はもうこれで打ち切りにせねばならぬ！」(註二)

(註二) カ・バジトノフ「販賣條件及び生産費に對する戦争の影響」<sup>ウエストニク・セリスカウ・オホジャイストワ</sup> 共同組合時報、一九一四年、第六一七號、二四頁。

戦時は、生活費を戦前の水準以下に切下げること有利である……思ふにバジトコフ氏は今この自作の論文を讀返して、殊のほか満悦を覺えるに違ひない。しかし氏の結論は論理的には極めて正しい。即ち輸出閉鎖は生活費の値下を來すべきに、生活費は昂騰を始めたのだから、この物價騰貴は明白に非自然的な性質を持ち、投機によつて作られたものである。この物價騰貴の責任者は商人だ。彼

等の投機行爲を中止せしめねばならぬといふのだ。

かういふ譯で俗物ばかりでなく、社會運動家も經濟學者も戰爭のために生活費の低落を來すものと期待してゐた。だから物價騰貴が始まると、彼等の立場から云へば市場の條件によつて辯明の立たぬ物價騰貴の發生を、商人の投機行爲の故にする傾向を見せたのである。

この輿論を一變せしめたのは全露都市聯盟が一九一五年七月十一日から十三日にかけてモスクワに召集した經濟協議會と、現代物價騰貴研究會の勞作が發表されるやうになつたからであつた。この現代物價騰貴研究會はアー・イー・チユプロフ記念社會科學討究會に附屬して設置されたもので、その會員が右の經濟協議會の報告者となつた。

戰時下における商人の活動の投機的性質に對するこの社會の信念を助長した今一つの原因は、個々の商人の疑ひもなく投機的な行動に對して、商業界から何の反作用も行はれなかつたことである。さうした非難もなく、相當な對策も講ぜられなかつたことを、民間では商人社會は皆んな投機をやつてこの多難な試練期に巨富を蓄へてゐるので、さうした投機的なやり口と一運托生になつてゐるのだと解釋した。やつと開戰第二年目の末に到つて、一九一六年四月廿四日から廿八日に到る取引所及び農業代表者第二回臨時大會で、戰時下の必要に應ずるやう商業を動員する問題が初めて提起された。しかし商業界にさうした社會的主動性がなかつたことは、軍民の必需物資の供給事業を政府機關が施行

したために起つたこの供給事業からの商業機關の強制的除外による所が甚だ多いのである。

つぎに商人に對するこの玉石混雜的な非難を大いに助長したのは、商人に對する政府機關、特に内務省の態度であつた。内務省は商人を物資不足と物價騰貴の唯一ではなくとも、主たる責任者と認め、商人に對し義務的法規・科料・縛捕をはじめ『投機者』檢舉や近距離地方への流刑にいたる一連の彈壓策を講じたのである。昔のある役人に「この書面がお判りになりますか」と訊ねたところ、それをじつと讀んで「判りはしないが、返事なら出来る」と答へたといふ小話は有名なものだ。それと同様に内務省も現代物價騰貴のやうな複雑な國民經濟現象の分析や理解には骨を折らないで、開戰劈頭から直ちに警察的強制策に訴へたのである。現行法によれば公定價格を發布できるのは市會だけで、それも穀類と肉類だけである。ところが内務大臣エヌ・アー・マクラーコフ氏は一九一四年七月卅一日に既に各縣知事に對し、「所定の手續をもつて生活必需品價格を調節する義務的法規を發布し、社會的難局に際して屢々發生しつゝある投機防止のため右の法規の有する權力を完全に行使するやう配慮すべし」と提議してゐる。それ以來、惡意の物價吊上げに對する地方行政機關の闘争が開始された。大小の商人は嫌疑をうけて拘引され、その活動は監視をうけた。一方、民間では商品拂底と物價騰貴が起つたら、それは投機商人の故だといふ信念が養はれた。知事連は、公定價格の發布を許す「所定の手續」をすぐに發見した。法律は彼等にその權力を與へてゐないので、知事連は増強警備令の與へる全

權を行使したのである。同令第十五條は長官に對し、「社會秩序及び國家安寧の侵犯の豫防に關係ある事物、例へば不動産所有者及びその支配人のその所有地内における内面的監督の義務、その監督の方法、所有者より上記の義務を托された人物の配置及び交替順序、等々に關し義務的法規を發布する」權利を與へるものである。今こゝでは國會が存在してゐるにも拘はらず、行政手續による増強及び非常警備令が毎年効力を持續してゐることの合法制には觸れないことにする。われ／＼に取つて今大切なのは右に引用した第十五條が果して公定價格發布をなすための立法上の基礎となるかといふ問題である。全く疑問の餘地なき點は、警備令が「社會の公安」のみを目的とする義務的法規の發布を規定し、福祉には全然觸れてゐないことである。經濟關係の調節をこの法令に立脚せしめることは出來ない、それ故、行政官憲の發行した公定價格に關する義務的法規は全部、違法の對策である。即ちある公式出版物の表現を使へば、「確乎たる法制上の根據を持たない」(註一)のである。

(註一)「ロシアにおける食料品公定價格制定の現状とその調節策」、食料問題對策審議統一協議會事務局の出版物、一九一五年、四頁。

十七、八世紀頃、まだ大工業と鐵道が發達する以前には、世界市場も國內市場もまだ胚芽状態で、國民經濟は國家の行政區分と大體一致した、一連の獨立した地方市場の寄集めであつたから、この種の價格公定もとにかく實行出來た。ところがこの二十世紀は、あらゆる地方市場を國家及び世界市場

に從屬せしめた大工業と鐵道の世紀であるから、價格調節は甚だ難事である。主たる難點は、市場の一部のみにおいて市場價格を調節できない點にある。現に、商品の價格は、この商品によつて市場の飽和された尺度の機能ではないか。市場の飽和が増大するにつれて、價格は低下する。ところが市場が商品に飽和してゐないで、しかもその商品に對する公定價格が(むろん自由市價より低く)市場の一部に設定されたら、その商品の全ストックは市場のその部分から搬出され、その後は搬入されず、商品は店舗から姿を消すのである。かやうに國民經濟の性格の變化、國民市場の發達は、市場への商品供給を第一位に置いた。云ふまでもなく、價格の調節は現代の國民經濟制度の下においても、戰時の状態下においても、利益を齎らすことが出来る。たゞその調節は市場の組織に適合せねばならぬ。國民市場が壓倒的重要性を持つ場合には、この價格指定は、(1)全國民市場を掌握し、(2)消費地における小賣價格のみならず、生産地における卸賣價格をも調節し、(3)既製品のみならず、原材料および燃料の價格をも調節せねばならぬ。のみならず商品の價格に影響する生産及び運輸條件に何等かの變動を生じた場合には、それらの變動を全部直ちに計算して、指定價格體系に反映せねばならぬ。(註一)

(註一) 指定價格體系は今一つの條件を持つてゐる。即ち單位貨幣の不變がそれである。もしも毎月紙幣の流通高が數億留も増加し、例へば一九一六年九月乃至十一月の三ヶ月間に信用券の流通高が十二億六千一百二十萬留も増加したやうな場合に、固定價格なぞ維持は出來ないのである。

かういふ譯で、二十世紀の物價指定の任務は、十七、八世紀より遙かに複雑になつた。わが行政機構はこの複雑な任務を解決するにも、その複雑さを完全に理解するにも全く無能力であつた。そのため地方行政官たちの無體系な、矛盾だらけの活動は、國民經濟生活の混亂を強めるばかりであつた。一部の縣知事は商品の價格を公定し、またある知事は各商品について商人の取り得る利潤の額を公定し、更にある知事は單に「過度の物價吊上げ」を禁止したゞけであつたが、商人たちは三〇〇〇留の罰金と、三ヶ月の監獄と流刑にびく／＼しながら、この辻褄の合はぬ措置に一々服従せねばならなかつた。

この行政官廳の實驗は、國家にとつて高いものについて。それは市場を支配してゐた無政府狀態を強め、物價騰貴を助長した。と同時に、それは市場價格の運動を支配する法則を解しない國民大衆の注意を、商人の「投機的」にして「惡質なる」行動に向はしめた。アー・エヌ・フヴォストフが内務大臣に任命されてから、問題のこの方面は一段と尖鋭化した。彼の右翼の同志たちは、最も斷乎たる投機對策の支持者で、例へばタラソフは投機者を軍法會議に附せよと勸告し、マカロフ二世は投機者を絞殺に處せよと忠告した。(註一)

(註一) 國會議事録、一九一六年二月十二日、一五三九頁、一九一六年五月廿三日 四五二九—三〇頁。

フヴォストフ氏は就任に當つて、自分の主たる任務の一つは物價騰貴防止であると言明した。新年

が過ぎて間もなく、各新聞は次のやうに報道した。「内務大臣は各縣知事に回章電報を送つて、現在國內に横行しつゝある生活必需品物價吊上の最も決然たる計畫的防止を行ふ必要に地方長官の注意を向けよとの皇帝陛下の聖慮を指示した。大臣は右の聖慮を實行に移すに當り、各縣知事に委囑して、市郡自治機關をこの工作に参加せしめ、一般警察及び憲兵の全官吏に對しこれに關する監視活動を強化すべしと提議した」。この回章は、新大臣が辿らうと考へてゐた方途を充分に示すものである。物價騰貴の原因は物價の吊上げであつて、それ以上の何物でもない。萬事は惡意の投機者にある。防止策は警察と憲兵で、これら投機者を取締ることである。機械は直ちに示された方向に動き出した。一月八日、モスクワでは取引所で『投機者』の臨檢を行ひ、特にユダヤ人を狙つた。續いてオデッサその他の都市でも臨檢が行はれた。一月九日には警保局から回章を出して、入手した情報によると、ユダヤ人共がロシア國內で全般的不平を煽動せんとする目的で、生活必需品價格の人爲的昂騰を起さすべく活動中であると述べてあつた。「敗戦も革命的煽動も廣汎な人生大衆に重大な影響を及ぼさないと悟るや、革命家と、その示唆者たるユダヤ人と、ドイツに内通した分子共は、饑饉と生活必需品の過度の騰貴を起させて、全般的な不平と反戦抗爭を捲起さんとした。惡意の商人共はこの目的で、商品を隠匿し、その提供を遷延し、各鐵道停車場では出来るだけ貨物の積卸を引伸ばしてゐることは疑ふべくもなす」。



この回章はいろ／＼な點で珍妙である。ミャソエードフを始め全ミャソエードフ團を輩出せしめた政府の官廳が、愛國心の問題について裁判官の役を演じ、エダヤ人と革命家は非愛國的氣分を持つてゐると斷定したのだ。彼等は戦争を中止しようと思んでゐる。その目的で生活必需品を人為的に値上し、物價を吊上げてゐる。商人は彼等の手に落ちた、従順な武器である。かくて物價騰貴は革命家とエダヤ人と商人が作り出してゐるのだ。犯人は擧つた。商人とエダヤ人が、國內經濟生活調整上の官憲の無能を償ふ贖罪の羊とならねばならぬ。

こんなに眞正面から愚蒙な大衆をエダヤ人と商人に向つて唆しかけたのだから、むしろ毆込の件數が少かつたのに驚くばかりだ。

内務省の對策が本質的には、あらゆる暗黒面と中世紀的殘存物を有する十八世紀の警察國家制度への復歸を意味するとすれば、わが商工界の提唱してゐる方策は疑ひもなく資本主義的近代精神をもつて貫かれてゐる。現代物價騰貴防止策に對するこの觀點は、取引所及び農業代表者大會事務長アー・エル・ラフアロヴィッチ氏が、一九一六年四月廿四乃至廿八日の同代表者第二回臨時大會で行つた報告の中に、特に系統的に展開されてゐる。ラフアロヴィッチ氏はその報告の中で次のやうな意見を展開した。(註一)

(註一) これより先、氏が「工業と商業」一九一五年第四號所載の論文に解説したものを。

「需要供給の法則は、正常な經濟條件の下においては、正常な商品價格を確立する上で最も強力な手段である。それ故、不常な物價昂騰を防止するには、まづこの經濟法則の正しき作用を妨害する諸事情を出来るだけ取除かねばならぬ。この見地から出發すれば、主として注意を拂ふべき點は國內の自由競争を容易ならしめることである。即ちこの基礎的目的の達成に、口先ばかりでなく、本氣で物價騰貴を防止せんとする人々の主要努力を向けねばならぬ。むしろ當面の條件下においては、これは容易ならぬ任務の一つではあるが、いづれにせよ固く銘記すべき事は、鐵道といふものがよつてもつて最も有効に不常な物價暴騰防止を行ひ得る調節器だといふことである。つぎに、前にも指摘したやうに、商業循環の多年の實踐によつて作り上げられた方法を堅持し、特に慎重かつ計畫的に商品の大量買付を行ひ、もつて結局は消費者の懐に損害を與へるところの激動を商業循環の正常な流れに出来るだけ起させないやうにせねばならぬ……以上述べた一般的性質の對策のほか、社會運動もむしろ物價に多少の影響を及ぼすことが出来る。例へば都市自治體が、物價騰貴の殊に甚しい消費物を買付けて正常の價格で賣るとか、またはこの種の商品の共同組合及び消費組合賣買をするが如きこれである。要するに、投機業者の不常な食慾と市場で競争することを目的とする一切の社會的發意はこれを極力獎勵支援しなければならぬ。けだしそれは社會を訓練して最も望まじき國內經濟生活上の大自然性に向はせるからである」。この報告は次の言葉で結ばれた、「前述の通り、食料問題の根本的解決は

運輸條件の整理といふ點に横はつてゐるが、現在の條件下において最も正しい食糧事情の取扱ひは遺漏なく討究した生産地及び消費地の公定卸賣價格を設定し、かつこれと關聯して消費地方への公定品の一定の輸送計畫を樹立することによつて達成される、との結論に達せざるを得ないのである。以上述べ來つた上で尙ほ述べて置かねばならぬ點は、前述の本問題解決法は理論的には至極正しいと思はれるけれども、實踐上は解決困難な障礙に必ず遭遇するといふ事である。けだしこの廣大なロシア帝國の全領土における公定品運輸業の組織と公定價格とを調和せしめることは、極めて複雑廣汎にしてしかも十分に整備のとどいた機構を要するが、現下の條件でかやうな機構を設けることは全く巨大な任務である。それ故、公定價格はよく／＼差迫つた例外的な場合にのみこれを適用し、その他の場合には經濟界に屈せず、従つて經濟界に大混亂の要素を齎らすやうな方策を用ひないで、商業循環の自由な運行をさまたげ、最も正しい價格調節器たる需要供給の法則の發現をさまたげる障礙物の排除を目的とする對策にとゞむべきである」。

取引所及び農業代表者第二回臨時大會は、大體においてアー・エル・ラファルグイッチ氏の報告の根本思想に賛成した。(註一)

(註一) 第二回臨時大會決議案、三三一三五頁。

全くラファログイッチ氏の云ふ通り、商業の自由はちぐはぐな行政的禁止事項や公定價格の混亂よ

りも優れてをり、立派に調整のといいた行政機構がなければ、行政權を經濟生活から遠ざけたがよいのだ。ところがこれが災難なのだ。ある商品の量が不足するか、またはその供給より需要が多いのにその輸送が不足すると、需要供給の法則は、その商品を餘り必要としない人々も、またそれを必要とはしてゐるが高値段を拂ふ資力を持たない人々も、需要を減少する結果を來す。公定及び固定價格のためこの種の不足品の價格が下る時は、その供給量が充分になるまで上述の機械的な需要減は起らないで、需要は常に供給を上廻はり、かくて周期的に公定品の不足を來たし、店の前には客が行列することとなる。かう云ふ場合には、需要供給の喰違ひは、六時間も八時間も店の前で張番をさせて置く女中や下男を持たぬ、貧困者が主として埋めることとなる。

かやうにいづれの制度をとつても、物價騰貴と商品拂底は無産者、特に労働者階級に殊にひどく響くのである。だから國會で肉類不足對策を討議した時、社會民主黨のアー・エフ・ブリアーノフ氏が、切符制度を施行してその消費を調節せよとあれほど強硬に提案した(註二)理由はよく判る。たゞこの消費調節のみが、生活必需品不足の重壓を有産階級から無産階級に背負はせることを防ぐことが出来るのだ。

(註一) 國會議事録、一九一六年五月廿三日、四五三四頁、一九一六年五月卅一日、四六六〇頁。

この對策は他の如何なる物價騰貴防止策よりも行政官權と人民大衆との結合を要求し、民間の發意

を要求し、行政事務への勤勞階級代表の組織的參與を要求する。おそらくその条件がなければこそ、わが國では切符制度がこんなに着手し難いのであらう。(註一)

(註一) わが國の經濟的後進性も切符制度の大發展を妨げてゐる。半自然的經濟下においては、消費の調節は極めて困難である。

要するに上記の生産品輸送價格及び消費の調節策を實行することは、國民經濟生活を理解し、自治體及び勤勞者の消費及び勞働組合と密接な關係を持ち、そして立派に機能をはたすところの行政機關が國內に存在してゐることを要求するのである。わが國にそのやうな機關が缺けてゐることは、戰爭によつて起された食料難防止上の主たる難點であつた。軍が武装した國民となる時、全國民が戰爭に参加する。ところがこの難局に面したロシア國民は、成功的戰爭遂行に必要な經濟機關を奪はれてゐるのである。ドイツは宣戰を布告するに當つて、必ずや、わが方の弱點の一つとして、國內の國民經濟力の動員及び組織といふ大問題を解決するに全く適しないところの、わが國家組織の時代後れをも計算に入れてゐたに違ひない。それこれの食料對策の經濟的必然性は、常にその實行の行政的および政治的不可能性に行詰つてゐる。國民の信頼を受け、かつ民力を組織する能力ある政府が必要だといふ問題は、本年十一月、即ち開戰以來滿二ヶ年半の終りに到つて初めて國會で眞劍に取上げられた。食糧危機の悲劇的性格も、その宿命的解決難もこれから出たのである。

## 第六章 戦後の經濟的展望

國民經濟の方面における未來の展望は、何よりもまづ戰爭が今後どれだけ續くかといふ事によつて左右される。

戰爭が勃發した時、多くの人は、それは二、三ヶ月とは續かないと考へてゐた。交戰双方の力の關係は容易に計算できた。そして交戰列強の政府は相互殺戮による計算の代りに、紙上計算で満足してゐるのである。この現代資本主義制度の破壊力に對する國家理智の勝利といふ希望は、砂上の樓閣であることが判つた。その後、戰爭は一年前後續くといふ期待を抱き始めた。即ち一九一五年度歳入歳出國家豫算は、「一九一四年下半年と、恐らく一九一五年上半期とは、戦時の支配下におかれるであらう」(註二)といふ豫想の下に編成されてゐた。

(註二) 「一九一五年度豫算案」、第一編、四一―四二頁。

大藏大臣ペー・エル・バルク氏は後になつて一九一五年度豫算案による高率の歳入未済の原因の一半は次の點にあると説明した。即ち「戰爭は同年度の全年中繼續したので、同年度下半は一九一五年度を見越して編成した豫算に豫定してゐたやうに、國內經濟生活の正常な運行への漸時的歸復の條件

下に経過しなかつた」(註一)のである。

(註一) 國會議事録、一九一六年二月十六日、一七三四頁。

この期待も一九一五年夏の獨逸同盟軍の戦勝によつて晝餅に歸した。一九一五年七月十九日、内閣議長イー・エル・ゴレムイキンは國會において、戦争は長期戦となる危険がある、と声明した。同年八月にはエヌ・エヌ・シチエブキン氏が、「モスクワでは戦争は今後少くとも二ケ年は繼續するといふ確信を抱いてをり、この確信は上下を通じてあらゆる國民階層に及んでゐる」と報告し、マルコフ二世は立憲民主黨代議士たちの意見に反對して、今後戦争は一年乃至一年間しか續かないと假定した。(註二)アー・イー・シンガレフ氏は一九一六年二月十六日、國會において、「我々は一六年度一杯、あるひは一七年度一杯戦ふであらうし、また戦はねばならぬ」(註三)と斷言した。最後に、ブルジョア將軍は本年八月に、戦争は一九一七年八月にならねば終らないと云つた。

(註二) 國會議事録、一九一五年八月十一日、六三五、六四四頁。

(註三) 同、一九一六年二月十六日、一七七〇頁。

戦争がいつになつて終るか、それは知らない。どうやら第三年度も全部戦争することゝなり相だ。決定的重要性を持つものは、一九一七年の夏季作戦である。更に勝敗如何については一層材料がなく、どういふ條件で媾和條約が出来るかは全く判らない。それ故、戦後の經濟景況については、全然

豫想が立たないのである。しかしその經濟景況の若干の要素は既に大いに決りがついて來たので、八卦をいぢつたり、コーヒーの出がらをあさつたりしなくても、もう議論が出来るのだ。

それにはこの三ケ年に互る戦争の若干の經濟的結果をまとめれば澤山だ。生産の方面では、戦争の影響は何よりも先づ民間の蓄積してゐた物的價値、資本の蕩盡に現はれた。敵軍に占領された各地方の戦前人口二千一百七十萬人の經營は完全に荒廢した。従つてロシアの生産力の約一二・四%が破壊したのである。有角家畜の約五〇―六〇%を徵發された戦線附近の諸縣でも經濟は大被害を受けた。

ロシアその他の部分では、生産力は殆んど被害を蒙らなかつた。軍が復員したら、播種不濟もなくなり、工場礦山労働の低生産性もなくなるであらう。しかしもつと本質的な重要性を持つのは、三年間の戦争中に機械器具の修繕が行はれなかつた點である。次に、被動員工業を平時體制に、平時の職務に再編成する場合にも、生産力の多少の損失は避け得ないであらう。要するに戦争はロシアの生産力を一五乃至二〇%方減少した。國民所得の分配については、戦時中特に工場礦山主の収入が増加し、その次に収入の多いのは産穀地方の地主及び富農である。穀類を買ふ工業諸縣の農民や、穀類を買ひ主として地元及び出稼農業労働の中間で食つてゐる黒土帶諸縣の小農は、これよりずつと立場が悪い。全然悪いのは工場労働者の立場だ。といふのは極く少數の例外を除くと、貨銀の増加は生活必需品の値下りに追いつかぬからである。媾和締約と、幾百萬兵士の平和業務への復歸は、一段と労働

者の立場を悪化するであらう。特に動員された男子の代りを勤めてゐる婦人にとつて、この問題は痛切に響くであらう。他方、戦線から歸つて來た者は、新しい要求を持つて來るであらう。彼等は腹一杯食ふことに慣れ、肉や牛乳や鶏卵に慣れてゐる。これらの要求と、實質賃銀水準との不釣合は、重大な争議の種を藏してゐる。この點ではむろん多くの點が、媾和締結直後に出來る一般的經濟景況に依存する。

クリミア戦争と露土戦争の國民經濟に對する影響を研究したヴェー・ペー・ベゾブラトフ氏は、次のやうな結論に達した。「どの戦争も、國民を如何に困憊させ、將來どんな經濟的結果を持つて來る戦争でも初めのうちは國家の經濟生活を活氣づけるのである。この現象はあらゆる國家の歴史的經驗によつて裏書され、また理論(常に到る處でかくありき、故にかくあるべし)によつて充分に説明出來るのである」。ベゾブラトフ氏はこの現象の主原因を、一時民間の購買力を増大するところの、戦争用の信用券發行に發見した。「強制相場を持ち、市場のあらゆる自然的經濟的要求に關係なく、暴力的に市場に侵入する不換紙幣の發行が、その性質上、價值喪失のため自然に購買力を失ふまで、工業熱(國民經濟の實際的な、健全な、不變な消費以上の生産増強)を刺戟し、投機を刺戟する理由は、こゝで改めて説明を要しないであらう」。(註一)

(註一)「ロシアの國民經濟」、第一編、二九三、二九五―六頁。

全く、これまで戦費はいつも國民の消費資金によつて賄はれてゐた。たとへば現戦争中、國民貯蓄資金は國內市場で行はれたわが國の歳出の一五乃至二〇%以下しか賄ふことが出來なかつた。この國民消費の強制的縮少は、信用券の發行によつてしか達成できない。しかし後にはこの信用券は國債の發行によつて流通面から回收されるであらう。わが國ではこの回收は充分には行はれなかつた。だから戦争の末期に到つて、戦争の用に充つる需要がやみ、物價は正常の水準に立戻るとき、信用が復舊し大部分の取引が信用で行はれるやうになる時、民間には信用券の形の自由購買力が約八十億留あるものと豫想出來る。一方、わが國民經濟の生産する物的價值は、(戦前の評價から生産力が一五乃至二〇%減つたとして)年額僅か百乃至百十億留にすぎない。こんな市場の状態では、あらゆる物價が戦時中より一段と昂騰し、留貨の價格は一段と低下することは明白である。そこで相當額の留切下げを行ふと、市場には必然に需要供給の平衡が確立される。しかしそれまではこの大量の國內紙幣は需要を増大し、釣上つた景氣を作り出す。このすばらしい市況は必然に短期——一年乃至一年半、いやむしろ數ヶ月——のものである、のみならず、農工業の發展にとつて効果のないものとなるであらう。ただしそれは新資本の形成に基くものではなく、抑制されてゐた消費力の實現に基くからである。

かう云ふ譯は戦争終了直後には高物價と商業の活況を期待せねばならぬが、ツガン・バラノフスキ―氏が何の根據もなく期待してゐるやうな「困難な産業恐慌と沈滞」(註一)は期待されない。

(註一) 氏の論文「ロシアは戦争から何を期待してゐるか」一九一五年一九頁。

そのあとで必然に産業沈滞が起つて、多年に亘つて繼續するであらう。戦争は多額の蓄積資本を滅滅した。それは資本主義以前の時代には生産手段および要具と呼ばれ、資本主義時代には資本と呼ばれてゐるものである。同時に戦争は三年に亘つて新資本の蓄積と舊資本の修繕を停止せしめた。戦後には人間労働は、戦後よりも遙かに悪い生産手段の裝備を持つてであらう。工業も農業もその發展に要する資金を持たないであらう。集まる限りのバン層は、被動員工業を平時の任務に適應せしめるために振向けられるであらう。あらゆる生産者は高度に生産手段を節約せねばならず、同時にその企業の生産力を最高度に遂行しようと努力するであらう。時代おくれの機械や、古色蒼然たる生産方法の使用は、生産品の価格を高め、労働力の價値を低めるであらう。復員後の賃銀は、高物價水準が保持してゐるのに、必然に低落するであらう。アー・イー・コノツローフ氏が國會において正しく指摘したやうに、開戦後数年間の國民經濟生活速度の低下は、「恐るべき物價騰貴の下において、益々殖へる増税の下において、賃銀の可能なる引下と關聯してゐるので、自己の生存を確保せんとする國民大衆の深刻な運動の條件を作り出すであらう」。(註二)

(註二) 國會議事録、一九一六年二月十九日、一九三一頁。

そして毎年形成される新資本が蓄積されるにつれて、市場の狀況も次第に向上するであらう。要す

るに、ナポレオン戦争後の十九世紀初頭の十年間に認められた、あの經濟沈滞が繰返されるであらう。

(註一) それ故「財政時報」に出たエム・エヌ・フリードマン氏の次の意見には決して賛成いたし兼ねる。「ロシアについては、敵國と雖も、わが祖國の戰力が今度の應争の重荷で崩壊するとは望めないのだ…… ヨーロッパの窮乏とか、多年に亘るロシアの零落とかを悲觀し、絶望し、豫言する根據はないのである。現戦争は經濟的には易々と體験されてをり、將來も國民經濟の發展を困難ならしめないと斷定したら、むろん變に聽へよう。しかしその氣になり、智慧を持ち、熱意があり、撻まず努力し、創造力と活動力を緊張して行つたならば、困難は克服され、失つたものでも取戻せるであらう…… 一口に云へば、國民經濟の領域においては、交戦各國の運命は決して戦争によつて宿命的に豫定されてゐるのではないのである」(「財政時報」、一九一六年第三七號、四〇七頁)。むろん戦争のため没落した國が、あとで富國となることはある。しかし撻まざる努力と餘力の緊張によつて數十年後に起ることは、別問題である。今われ／＼の興味を惹くのは、見通しのきく近き將來——向ふ十ヶ年間——であつて、これは戦後になつて、國民經濟的没落の目印の下に過ぎて行くであらう、この期に關しては、フリードマン教授の云ふやうに悲觀の根據ではなくて、反對に樂觀の根據がないと私は思ふ。

講和締約の直後には、通貨量と留相場の問題が特に切迫して來るであらう。開戦第二年末、即ち一九一六年七月一日現在で、國庫短期債券割引のため三十八億二千三百七十萬留の信用券が發行された。その上、別の用途に充つるため十一億七千四百二十萬留、合計約五十億留となつてゐる。七月一日現在では信用券發行高は六十七億五千三百十萬留に達した。もし戦争が一九一七年七月まで續くものとすれば、紙幣の流通高は更に二十五億前後の増加を來たすであらう。もしこの大量の信用券が、

戦前からあつた十六億三千四十萬留と共に流通面に残つたならば、國內市場には絶大な自由購買餘力が生ずるであらう。現在では著大な信用券流通量は、戦争の用に充つる需要と、市場に信用がないための現金取引の支配に影響された、全商品の高物價と關聯してゐる。しかしこの二つの契機が作用しなくなつたら、即ち軍の需要がなくなり、手形が昔の通り大取引の基礎的方式になつたら、貨幣流通の必要高はどう見ても二十五億留を超えないであらう。従つて右の八十億は過剰である。もしこれを回収しなければ、留の價格は非常な低水準に達するまで低落するであらう。

現在國內市場に認める留價格の低落は戦時の事情によつて起つたものであるから、民間では一時の過渡的現象と見てゐる。それは留貨の低落といふより、むしろ物價の昂騰によるものと解されてゐる。戦争がすめば戦時の必要に充つる需要はやみ、労働者は戦争から歸り、物價は平準に歸り、留の購買力は復舊すると云ふのである。ところが流通面にある餘分な數十億の信用留券がこの俗流樂觀論を打ち碎くのだ。それは必然に現在の高物價を戦後に持越し且つ一段と激化するであらう。しかるに貨幣單位の價格の著減は、必ず國民經濟に重大な影響を及ぼす。貨幣の價值喪失で第一に被害を受けるのは、貨幣資本の所有者と、一定の俸給を受ける官吏と、労働者である。この労働者が困る理由は、貸銀増額はいつも生活必需品の物價騰貴より後廻りになるからである。次に信用券の金兌換停止と、留相場の變動は、あらゆる經濟業務の打算的遂行を不可能ならしめ、あらゆる商工業に駆引の

要素を入れる。相場が下れば下るほど、その上下の振幅が大きければ大きいほど、爲替相場の變動による豫想のつかぬ偶發的な損益が大きくなり、商業計算に基く蓋然的利潤を遙かに越すこともある。かう云ふ状態では健全な計算は遊戯に、賭博に代り、全經濟生活は完全な混亂に陥るであらう。開戦第二年目の終りには留紙幣の相場は六〇・三金哥に落ち、一九一六年十二月前半には五九・四金哥となつた。流通面にある百五億留の信用券は一段とわが留相場を傷け、その變動の振幅を極めて著大ならしめる危険がある。

戦時中、國際市場の留相場に影響した主たる經濟要因は、對外收支勘定の受取不足であつた。戦後では主たる意義を持つものは、おそらく信用券の流通高であらう。戦時中わが對外債務は五十億留増加するものと考へてよいが、その元利支拂は年額約三億留に上る。戦前のわが輸出年額は平均十五億一百四十萬留、輸入十一億三千九百六十萬留、差引貿易尻は三億六千一百八十萬留の出超であつた。これを八〇%増加することは困難である。國民經濟に大損失を與へない様に、外國品の輸入を大減少せしめることは、けだし不可能であらう。輸出の大増加も、わが主要輸出品たる小麥、大麥、バター、鶏卵、亞麻、木材（戦後、火酒の取引が再開されたら、これら輸出品に酒精も入るが）の價格が上つたにも拘はらず、疑はしいものだ。むしろ留相場の低落はその都度、輸出入品の物價を高めて、輸入を減少し、輸出を増大して貿易尻を改善する傾向はある。もしも留價格の低落が對外收支決濟の

状態によつて起つたならば、この低落の收支勘定への逆効果は留相場の過度の低落を防止するであらう。ところが信用券流通高が過度なために起つた留相場の低落はこれと性質を異にする。戦時中に信用券の形で民間に蓄積された総購買力は、必然に輸入を増大する。のみならず、輸出をも縮少する。のみならず夥しい貨幣遊資は有價證券の相場を一層高め、その輸入を増し、更にわが對外收支決濟を悪化するのである。かう云ふ譯で、この過剰信用券が市場から回収されるまで、または留相場が大體二〇乃至二五哥に低落するまで、——さうなれば一百五億の信用券は、戦前に二十二億の通貨の果してゐたのと同じ仕事をする事になる、——この大量の自由購買資金の壓力はわが留相場を下へ下へと押しつけて行くであらう。

この留相場の低落がどれ位の物價騰貴の危険を持つてゐるかは、次の一例を見れば判る。十二月の初めには春蒔小麥一ブッシュエルの値段はニューヨークで一九一仙乃至一九四仙半であつた。留相場が一〇〇金哥なら、この小麥相場は一布度につき二二七乃至二三一哥となる。ところが現在の留相場(二九<sup>三</sup>/<sub>八</sub>)なら、小麥一布度はロシヤの金で三四六乃至三五二哥となるのだ。その頃ニューヨーク市では春蒔小麥一布度二留一〇哥となつてゐた。ニューヨーク市からロンドンまでの備船料は、ニューヨークからよりも少し高く、イタリーまでなら合衆國からより安い。かう云ふ次第で、もし今でもダーダネルス海峡が閉鎖されてゐなかつたら、わが國內市場の小麥價格は少くとも一布度につき一三五

乃至一四〇哥の昂騰を來したであらう。これ以上留相場が下つたら、わが國が外國へ輸出する生活必需品——穀類・バター・鶏卵——は大した値上りを來すであらう。さうなれば生活費の昂騰は大變なもので、戦争中は物が安かつたと思ひ出話になるであらう。

かう云ふ譯で流通面から八十億留を回収することは、戦後のわが經濟生活の健全な發展を來す一條件である。さうなれば、われ／＼は一留が一〇〇金哥の状態に歸るであらう。

しかしあらゆる兆候から見ても、過剰信用券が流通面から遠ざけられると豫想できないのである。一九一六年二月四日附の國立銀行發行權擴張法案の中に大藏大臣はわれ／＼の興味を惹くこの問題について、至極はつきりと次のやうに述べてゐる。「兌換および正常なる貨幣流通の復興は國內の有利な經濟的および財政的諸條件が揃つて初めて可能となるものであつて、殊にわが國においてはロシヤの生産力の活潑化と發展に依存するもので、これが發展すれば國民經濟の増大し行く循環に仕へるため既に發行済みの信用券の大部分が要求されるのである」。従つて、大藏大臣は戦後に信用券を買戻し、兌換を復興する意志はないのである。正しき貨幣流通は、わが國民經濟生産力の將來の發展の問題だといふのである。しかし一九一六年六月十七日、ボスニョフ氏の報告によつて國會を通過した希望は、講和條約批准後一ヶ年以内に國會に對し金本位貨流通復興法案を提出する責任を大藏大臣に負はせたものだが、これは極めて曖昧なといふ缺點がある。國會はどうやら、兌換復興をなし得る唯一の方策



たる過剰既發行信用券回収の必要を直言する決心がつかなかつたらしい。國會がこんな云ひのがれめいた決議をした理由は全く明白である。國會の豫算委員會では既に一九一五年の十二月に、金とは今後永い間別れて居らねばならぬといふ議論があつたのだ。一九一六年二月十六日の國會の席上、アー・イー・シンガーレフ氏は、ロシアを含む交戦各國が、戦後に平價切下げの問題を提起するのは、全くあり勝なことだと認めた。エム・イー・スコベレフ氏は二月十九日の議場で、シンガーレフ氏の言葉に對し、或ひはロシア一國のみが先づ第一に平價切下げの舉に出でざるを得ないかも知れない——といふ修正を提議した。國會議員諸君の氣分がこんなでは、はつきりした決議を採擇することは出来はしない。

この問題を樂觀してゐるのは、ゼ・エス・カツエネレンバウム氏一人のやうだ。氏の考へは、戦争の末期における信用券流通高は僅々八十億留(註一)で、このうち四十億は物價騰貴のため流通面に必要で、あとの四十億は戦後に國債を發行して漸次取戻すことが出来ると云ふので、従つて氏は大藏省の努力を留價値の完全回復に向はしめることも可能と認めてゐた。(註二)

(註一) 十二月一日、アー・イー・チニプロフ記念會における報告演説では、カツエネレンバウム氏はこの額が百億留に達するだらうと假定した。

(註二) 大ロシアの諸問題、一九一六年第三及び九號、「工業と商業」一九一六年第一九號所載ヴェ・シテイン氏の論文を参照せよ。

カツエネレンバウム氏は、氏自身の計算によれば留貨の完全回復のために買戻すべき信用券の高が四十億留ではなくて、五十五億留だと云ふことを見落してゐる。何となれば、四十億を買戻しただけでは、留相場は現在の既に六十哥臺に低落した水準に保持されるにすぎない。しかも氏は開戦第三年目のわが信用券發行高は二十億留以下だと豫想してゐる。これは餘りにも樂觀的な觀測で、七月から十一月に到る五ヶ月間に既に十七億五千五百二十萬留の信用券が流通面に放出されてゐるのだ。しかしカツエネレンバウム氏の最大の誤謬は、氏が戦後に通貨整理内國債によつて四十億留の信用紙幣を流通面から回収できると考へてゐることである。

疑ふべからざる事は、わが通貨膨張が續くかぎり、即ち過度に發行された信用券が流通面に残存するかぎり、貯金局や銀行の預貯金の増勢は、その信用券を流通面に放出してゐた戦時中に比べれば、低下するかも知れないが、戦前の普通の水準より遙かに高いといふ事である。次に信用と手形流通の復活は、多額の信用券を遊資となし、それが貯金局や銀行に流入するであらう。現在農村に蓄つてゐる金も、戦争が済んで農民が私有地や官有地を買ふ可能性を得れば、やはり市場に入つて來るであらう。従つて、市場には遊資がだぶつくであらう。しかしわれ／＼として疑問に思ふのは、政府がこの遊資を流通信用券回収に向け得るかといふことである。といふのは政府の眼前には、戦後經營と國家豫算の歳入不足補纏との燒眉の經費が出て來るからである。

かう云ふ譯で、これらの過剩信用券は戦争の終る前に流通面から回収して置かねばならぬ。疑ひもなく過剩信用貨幣八十億留を全部買戻すことは、工業階級から斷乎たる抵抗を受けるであらう。この階級にとつて留貨の舊價格（一〇〇金哥）回復は不利である。何となれば留貨が高くなる度に、工業家は高い値段でストックして置いた原材料の價格で損をし、しかもその高い原材料で作つた製品の價格は安くなる。更に貨幣價値の騰貴は労働者の賃銀昂騰となるのである。留價が低落した際に賃銀の増額が物價の昂騰より後廻はしとなつたとすれば、留貨が昂騰する際には賃銀の低落は一段と物價の低落よりおくれるのである。ストライキにも到る労働者の決然たる抵抗はこの賃銀低下を妨げるであらう。そこで産業界は戦時中に起つた留貨の價値喪失（一九一五年十二月一日以降、留の相場は六〇金哥前後を上下してゐる）で妥協しようと主張するであらう。労働階級の政治勢力は工業家諸氏のこの努力に對抗すべく餘りに弱い、しかし留價が六〇金哥以下に低下しないやうにするには、流通信用券の額は四十億留を超えてはならぬ。従つて少くとも六十億留の信用券を買戻さねばならぬ。いやもつと正確に云へば、信用券の新規發行をしないで、一九一六年十二月一日までに發行すみのうちから約四十億留を買戻さねばならぬ。

しかし今日まで國家が金融上の必要を満して來た制度を持續しては、過剩信用券を流通面から回収するなどいふことは問題にならぬ。一九一五年八月に初めて短期國庫債券の額面は十萬留から五千留に下がり、十二月末には一千留に下つた、つまり有産階級の中に消化する可能性が出來た。ところが民間ではその遊資を國債に投下する熱意か認められないのみか、却つてこの種の投資を差控へる態度さへある。かくて通貨高は一九一六年七月一日までに六十六億六千八百十萬留といふ巨額に達した。即ち戦争直前の通貨高を殆んど三倍も超えたのである。同年七月以降十一月までに更に十七億五千五百二十萬留の信用券が發行された。疑ひもなく國內には極めて顯著な自由購買力の流入が認められる。にも拘はず戦時國債は、次表に示す通り、主として各金融機關の預金によつて消化されてゐる。

各金融機關 預貯金總額	國債(註一)	
	國債總額中の預 貯金の割合(%)	國債總額
一九一四年七月—十二月	五三・三	九五〇
一九一五年一月—六月	一〇七・六	一九七五
七月—十二月	一一六・八	一六五〇
一九一六年一月—六月	二二一・四	二七〇〇
計	四八九五・六	七二七五

(註一) 國內市場で消化した短期國庫債券を含む。

かやうに個人の手許に残つて、金融機關の當座勘定に入らない遊資は、餘り國債に入らないのである。遊資の預金者はこれを國債に投資することを好まない。この現象は、國內財政委員の拙劣さを證

明する。その原因は、一九一五年四月四日、國會の豫算財政聯合委員會においてアー・イー・シンガー氏の断定した(註一)やうに、ロシアの國家權力に對する信頼が足りないためであるか、それとも國民一般が國政及び國家の必要に對して無關係になつてゐるためであるか、——とにかくこの現象の結果として國內流通通貨量の異常な増大を來してゐる。のみならずこの表の一等下の段に示す通り、國債消化のための預貯金以外の個人資金の利用は半期毎に低落してゐる。開戦第三年目になつたら、わが大藏省は戦争の用に充つるため、金融機關の預貯金利用といふ手輕な任務だけに停めるかも知れないといふ心配がある。

(註一) 豫算財政聯合委員會議事録、一九一五年四、五、六月、一九頁。

この明白に不十分な國內遊資利用の結果、一九一六年八月廿九日、國立銀行の發行權は三十五億留から五十五億留に引上げられ、一九一六年十二月五日には更にこれを六十五億留に擴張する法案が提出された。國債に對する態度が現に見る通りでは、戦費賄ひのため信用券發行は避け難い。この絶ゆることなき發券は、留の價值を喪失せしめ、戦争の必要に充つる國庫の支出を増大せしめ、更に一段と紙幣の發行を餘儀なからしめてゐる。ひとたびこの二つこの路に足を踏み入れると、國家財政はその後とめどもなく斜面を轉落するのである。明かに、わが國は各自治機關や産業を動員したと同様に、財政的動員を行ふ必要がある。でなかつたら降り積つて來る信用券に埋れ死にするであらう。危

険は大きい。機を失せずに対策を講じなければ、わが留貨は現在の六〇金哥前後から、更にその三分の一の二〇乃至二五哥に低落するであらう。さうなつたらあらゆる物價も現在の三倍になるのである。

紙幣の發行は、國家が國民消費資金から借入れを行ふ必要がある時、蓄積資金では國家の必要を充たすに足りない時には、むろん必要である。しかし餘分な紙幣を流通面にとめて置く必要はないのだ。紙幣がその任務を果たし、民間の消費資金の一部を吸収したならば、直ちに長期國債を發行してこれを回収することが出来るし、また爲さねばならない。過剰既發行信用券の回収には、むろん特殊の方策が必要である。

しかし國民と社會が政府に信頼を措かず、十分な經濟組織を持たない場合に、そのやうな國內財政動員が出来るであらうか？ 民間に在つて、金融機關の當座預貯金となつてゐない遊資を、國家金融の必要に應ぜしめることが出来るであらうか？

わが國家豫算もこれに劣らず危機的狀態にある。戦前の一九一三年には二十一億三千四百萬留の租稅收入と國有企業財産收入(その營業費を除く)を持つてゐた。酒類飲料販賣の停止(これは新稅の施行と舊稅の増額によつて漸次埋めて行つた)、敵軍のわが一部領土占領、それに國內經濟活動の低下は、一九一四年度には歳入高が十七億五百十萬留に、一九一五年度には十七億四千五百七十萬留に低

下する結果を來たし、一九一六年度の租稅收入は十八億二千三百四十萬留、一九一七年度は二十二億九千三百七十萬留と計上されてゐる。經常部歳入の大赤字を承認したくないので、國家歳出の一部を軍事基金負擔に繰入れた。即ち陸海軍費五億一千二十萬留、官營鐵道、郵便電信從業員待遇改善費數千萬留、その他がこれである。わが經常部歳出は戦前には豫算委員會の計算で毎年一〇%の増加となつてゐたが、戰爭のため國民經濟の蒙つた被害は國家の消費を一段と増加するに違ひない。その數字を一〇%とすれば、一九一七年度にはこの歳出を賄ふためわが歳入豫策は三十億留に達せねばならぬ事が判る。戦時中に行はれた國債關係支拂は十二億留を超える。國會豫算委員會の計算によれば傷病兵扶助費、軍人の年金及び補助金には毎年約三億留を要する。豫備兵器の復舊、破壊された鐵道その他の物的財産の復舊、個人の喪失財産の補償金、市町村への貨幣給付、ならびに敵軍のため荒廢に歸した地方住民の住宅及び經營復舊給付金などで、年額六億五千萬留以上が必要である。合計五十一億留以上である。もし通貨調整のため八十億留の信用券を流通面から回収するとすれば、國家歳出は更に四億四千萬留の増加となる。これに反して、もしもこの信用券を流通面から回収しないならば、留價格の低落に比例して、租稅收入總額は減少し、硬貨國債に關する支拂、官吏從業員の俸給その他の國庫支出は増加し、これを合計すれば右の五億留を遙かに越すことになる。かやうにわが國家豫算は營業費及び運轉資金收納を除いて、一年五十五億留に達し、これらの歳入出を加算すれば約七十億留に

上る。戰爭のため切り詰められた國民所得を百乃至百十億留とすれば、この額は國民所得への賦課率約五〇%となる。國家は國民年收の約半額を取上げねばならないのである。

この状態は、一九一五年八月、前大藏大臣ウエ・エヌ・コフツェフ氏をして、今やわれ／＼は『容赦なき租稅地帯へ』足を入れつゝあるのだ、と上院で言明せしめた程になつてゐる。

國會は所得稅を可決し、大藏省は直ちに一般財産稅の問題の研究に着手すべしとの希望を表明した。しかし現在の政治機構の下においては、財産や資本を兵役義務に服させることは不可能である。例へば、イギリスでは資本額の六%を稅率とする直接稅の施行を立案中であるが、これは年に約百四十億金留を國家に與へるものである。この案によれば、全有產者はその物的資材をもつて敵國反撃に参加せしめられるのである。われ／＼としては、現存條件下において、このやうな稅をわが國で施行出來ると豫想することは出來ない。國會の豫算委員會では價格増大稅の施行や、現行遺産相續稅の引上げの問題が取上げられてゐる。しかしこれら有產者への課稅が、國家の必要とする數十億の金を與へ得ないことは明白である。これらの稅は第一着に施行すべきものであるが、これでは足りない。従つて將に來らんとする難局は、勤勞、無產者の負擔してゐる租稅をも必然に増加するであらう。織物稅のほか、約一億五千萬留を上げるシャツ稅や、その他の稅も幾つか施行されるのであらう。大藏大臣は一九一七年度豫算案の中で、近き將來に施行さるべきものは織物稅、遊戯稅、電力稅、澱粉糖

税及び狩獵用火薬税であると知らせてゐる。これらの税を皆んな集めてもおそらく二億五千萬留以上にもならないであらう。火酒販賣が再開される危険もある。何となれば大藏省で立案した現行税制改革案は、當面の財政問題を本質的に解決できないからである。

多くの人は一連の專賣制に國家財政の救ひを求めてゐる。豫算委員會では、砂糖・茶・コーヒー・鹽・マッチ・タバコ・調味料・燈油・石炭・白金・木材・水力・保險——合計十三種が專賣制が擧げられた。しかし國家が掌握して有利に商賣をやつて行ける品目は、現在既にその商業を少數の手に集中されてゐるものか、またはその生産が少數の大資本家企業に集中されてゐて、従つてその商業の集中が容易なものか、でなければ既に間接税をかけたもので、従つて大藏省では、計算ずみのものである。その國の産業發達の度が高ければ高いほど、大資本の企業、シンヂケート、トラストが多ければ多いほど、その國では國家專賣を行ひ易い。一九一三年わが國で營業してゐた商工株式會社数は一七七九社、その資本額五十四億九千一百六十萬留で、五億六千九百七十萬留の利益をあげ、二億四千五百六十萬留の株主配當をしてゐた。これらすべての大資本主義産業を專賣制にしても、國家豫算の赤字を埋め得ないことは明白である。しかも工業家とその従業員を官吏にしても、國內生産力の發達を助長できないではないか。いくら資本主義生産制度が悪くても、とにかく經濟的進歩の路を辿つてゐるのだ。ところが産業の官僚化は經濟的沈滞の危険を持つてゐるのである。おそらく結局は三つか四

つ以下の專賣制が行はれ、それが專賣品の價格を大いに引上げた結果、せいぜい三、四億留を國家に與へるであらう。

事態は歳入不足必至となつてゐる。これは一九一五年十二月十五日國會豫算委員會の席上、大藏大臣が公然と認めたところである。大臣は將來の經費を説明して、「如何なる租税をもつてしても、國庫のこの新經費を賄ひ得ないことは、自明の理である」と述べた。一九一六年二月十六日の國會の席上では、大藏大臣は次のやうに通告した。即ち大藏省においては「ひろく極めて豫想的な計算ではあるが、戦後數年間に於けるわが歳入出豫算の狀況を調べて見た、この計算が疑問の餘地なく示す一つの必然的戰爭の結果がある。それは即ち現在われ／＼の手許にある歳入財源では將來の歳出を賄ふに不十分で、いづれにせよ向ふ五ヶ年間は歳入不足が尨大な數字に上るであらうと云ふことである」。

明かに豫算の赤字はあらゆる交戦國において必至である。しかし産業の發達した富國は急速にこれを克服するであらう。貧乏國たるわが國は、同盟各國よりも比較にならぬほど悪い立場に置かれるであらう。

エム・イー・ポゴレーポフ氏は、戦後の歳入不足が歳入豫算の四〇乃至五〇%、歳出豫算の三分の一に達することもあり得ると認めてゐる。(註一)

(註一)「將來の路について」、「經濟計畫の問題について」、一九一六年六九頁。

かう云ふ譯で、かりにドイツ及びその同盟各國に對して光輝ある勝利を得ても、わが國は極めて、暗澹たる經濟的および財政的展望をまぬかれることは出來ない。今となれば、歐洲戦争がわが國の財力に餘るものであつた事が、全く明瞭となつた。われ／＼は過去において生産力の發達に充分の注意を拂はなかつた報ひを受けてゐるのである。われ／＼は國民經濟に重傷を負はせ、わが財政を完全に破壊して、その代償を拂つて勝利を買取つてゐるのである。無酬の勝利ビロイワ・ポベダといふものもあるではないか。この戦争の眞の勝者となるものは、よく自國の國民經濟生産力を急回復し、その一段の發展に進み得る國家である。さうしなければ、國民が戦争に捧げた犠牲は、無駄な犠牲となるであらう。

現代の解釋によると、戦争は國家の精神力と物質力の自由なる發展を確保する手段としてのみ許容できるものである。戦争目的は諸民族の文化・發展の目的に從屬される。戦後にこの發展の必要條件が創造されないなら、戦争も無に歸し、戦争のために費した勢力も無駄に終るのだ。

大藏大臣は、戦争が我々の前に提起した任務は大藏省の資力では解決できないと公然と認めた。國家豫算の不可避の赤字、しかも老大な赤字は、二つの方法によつて排除できる。「その一つは豫算の狀態に對する例外的な配慮である。この路を選んだら、出来るだけ近き將來に赤字なしに豫算の辻褃を合せることを目的とした最も強硬な租税對策を講ずる義務がある。それと同時に、この最重要目的への努力は、將に來らんとする赤字の脅威の下に、國家生活のあらゆる領域において至難の節約を勵行

すべしと鼓舞し、あらゆる新規經費を恐れしめ、全國民經濟に鐵の如き行政的統制の手を加へしめるものである。しかしまた別の道もある。それは財政制度を國庫の状態を最も急速に強化することに依存せしめずして、國民財政の増大に依存せしめ、従つて租税對策を單に歳入不足補填ばかりでなく、國內生産力の發展の立場からも實行することである。この目的に進めば、國民の支拂力を破壊しないやうな税目ばかりにとゞめねばならぬ。新規經費でも、生産者がこれをこなして呉れるなら、怖れる必要はない。眼目は——國庫の側からの過度の監督後見に縛られない、民間の自發的經濟活動のために廣い路を拓いてやる必要がある……政府においてはこの最後の國內生産力大發展の路こそ、わが經濟及び財政政策の正しい路であると認めてゐる」。(註一)

(註一) 國會議事録、一九一六年二月十六日、一七四三—四頁。

この國內生産力發展計畫のうちで中心的地位を占めるものは鐵道の敷設である。大藏大臣は一九一六年十二月十五日、國會議算委員會で次のやうに述べた。「財政の方面ではわれ／＼の任務は出来るだけ澤山の鐵道を敷設することにある。余は、わがロシアにおいては交通路のみが眞に國內生産力を高め得るものと認める」。

向ふ五ヶ年間に三十億留の經費で三萬露里の鐵道を敷設する豫定になつてゐる。數本の輸送鐵道が敷設され、それがドネツ炭田、シベリヤ、中央アジアの貨物輸送を容易にし、更に一大鐵道網が敷設

されて未開發の石炭・石油その他の礦物、木材などの天産の開發ならびにシベリヤ及び中央アジアの移民地の役を勤めるであらう。ロシアの北部地方にも大いに注意を向ける豫定になつてゐる。

この計畫は一舉に幾つかの目的を達するものである。戦争はこれだけの物的・價値を絶滅し、あらゆる參戰國の生産力をこれだけ弱化したので、戦後には資本の需要は極めて大きく、しかも新資本の形成は甚だ難澁するであらう。世界資本市場が右のやうな状態ならば、外國資本をロシアへ誘致することは甚だ困難となるであらう。この場合最も成功の見込の大きいのは、わが礦山富源を外國資本に賣渡すこと、鐵道公債の二つの方式である。かう云ふ譯で、鐵道敷設計畫は、外國資本の誘致を容易ならしめる。(註一)

(註二) 工業及び商業代表者大會事務局の考へでは、戦後、外國資本はわが國に入ること非常に喜ばないであらう。政府は現在の條件下におけるロシアへの資本輸入を心理的に不可能ならしめた。現在ロシアで行はれてゐる政策は、まるでわが國への資本の流入を嚇しつけてゐるやうなものである。實際、戦前にはドイツ人と、彼等の企業と、資本は招かざる客ではなくて、ロシア國土の主人であつた。個々の研究家はドイツ資本の消極面に注意を拂つてゐた。それはドイツから輸出される資本の共通の性格にもあれば、その資本がロシアにおいて遭遇した特殊の條件にもある消極面であつた。しかし戦争になるまではドイツ人のことは大目に見、平時には厚く保護してゐたのである。それだけ戦時下になつて、國內の全經濟上重大な役割を演じてゐる大企業を荒廢せしめ、幾世に來の關係を蹂躪し、權利と財産の安全を片つぱしから破壊したことは、いよゝ凶惡な行爲と見えるのであつた。フランスとイギリスは外國資本を必要としない。したがつてこの兩國はその採用する政策の外國資本の心理への効果を顧慮する必要はない。ところがロシアはさうではない。わが國はこの外國資本を必要としてゐる辭に、これを嚇かして追つ拂つた

のである。このためわが國の失ふものは、さなきだに最近ではロシアにおいても重要性を失つたドイツ資本ではなくて、世界の資本市場である。今日ドイツ資本の上になることは、明白な *marktaus markanda* (然るべき變(化を加へて)) どの國の資本の上にならないとも限らないではないか——とは外國資本家の誰しも云ふ所である」(「ロシアの生産力發展策に關する大會事務局報告」、一九一五年、三六四頁)。

つぎにこの計畫はわが對外收支決濟の支拂超過を埋め合はせる。鐵道敷設計畫の大部分は國內で行はれる。従つて、外國では鐵道借款は國際決濟に一大プラスとなる。最後に鐵道の新設はわが生産力の發展を大いに助長し、戦後に必至の産業沈滞を輕減することが出来るであらう。

しかし國內に鐵道を設置することは、生産力發展上の一つの手段にすぎない。この目的を目指す對策は三つに分類できる。その一つは國內生産要因の増大を目的とするものである。例へば國內勞働力數を増加する對策——勞働者の榮養、健康及び知的發達の向上、職業教育の發達など——または國內の資本量を増加する對策——外國資本誘致法など——はこれに屬する。第二の對策は、各經濟企業におけるこれら要因の利用を容易ならしめる對策である。すなはち株式會社設立の申告手續、礦山企業の自由、移動の自由、旅券及び指定居住地の撤廢、空閑地への農民の移住獎勵、鐵道敷設計畫及び信用制度の發達がこれである。第三種に屬するものは個々の生産部門の特殊保護策で、——例へば機械および原材料の無税輸入、金融特典、「コルボヴィーチエストヴエンスイ」關稅の設定、特典鐵道運賃の施

行などである。

これらすべての問題を討究するため、エヌ・エヌ・ボクロフスキー氏を會長とする特別財政經濟委員會が設けられた。しかしわれ／＼は、その會が何を爲したか、大體何かやつてゐるのか、それは知らない。戦後ロシアの生活で經濟問題が主位を占めることは疑ふべくもない。戦争はわが國民經濟を荒廢せしめ、國家經濟は破産に瀕する状態まで押し詰められるであらう。従つて經濟問題は戦後には最も急を要する問題となるであらう。この問題の前に出ると、わが國民生産のあらゆる問題は生産を失ふに到るであらう。

ところが茲に危險がひそんでゐる。經濟問題の重要性を確認すると、他のあらゆる問題を否定する結果を來す可能性がある。まるで國內生産力發展の問題は、政治的、民族的、その他の問題を解決せずとも、無知にして無權利な住民のまゝでも、解決できるかの如く考へかねないのである。次に工業の利害を工業家の利害とすり替へ、國民經濟の利害を資本家階級の利害とすり替へようとする努力も必ず現はれるであらう。例へば、ロシアの生産力發展策の問題に關する合同工業の覺書<sup>ワシントン</sup>には、戦後においては國民勞働生産性の増強問題は、國民の富分配の問題より先に立たねばならぬ(註一)と正面から述べてあるのだ。

(註一)「ロシア生産力發展策に關する大會事務局の報告」、三頁、エム・イー・ボゴレーポフ氏も「將來の路」一九一六年、

四六頁において、これと同一の結論に到達してゐる。

これではまるで、榮養は悪く、飯場や物置のやうな鈎床小屋に住まひ、一般教養も職業教育も持たず、勞働組合も政治的權利も持たない勞働者を使つても、産業の發達がやれると云ふやうなものだ！かう云ふ譯で、戦後には生産力發展の問題の正しき取扱ひをめぐつて激烈な闘争が控へてゐるのである。

現在はこれらの問題は、自己の活動を嚴秘の扉で包んでゐるエヌ・エヌ・ボクロフスキー氏の委員會で解決中である。

しかしわが國の支配的官僚は、誰しも豫想してゐた戦争に對してロシアの準備なす能力がなかつたし、わが國が毎年數億留の食料品を輸出してゐるにもかゝらず、この官僚は食料問題をやりこなす能力がなかつたし、一九一五年の春には官僚はわが國に兵器彈藥もなからしめ、また一九一六年の春には砂糖も肉もなく、麥粉さへ殆んどない状態に陥れたのであるから、この支配官僚が國民經濟生産力發展の問題をやりこなして行けると考へる譯には行かないのである。今、この戦争の終了する前に、ロシア社會の活動的勢力は、この問題を解決するための準備工作にもう着手せねばならぬ。



975  
156

終

